

11

初めては
取り戻せないけど。

川鵜鶏肋
春屋アロツ
なぎ
Fukapon

mnfikmyhk
CREATURE MIXING

CONTENTS

しのり7／17

よくあるやりとり

がベーじこれくしょん

禁じられた営み

川鵜鶏肋 02

春屋アロツ 44

なぎ 47

Fukapon 49

次こそと次も言う X3

若返りの薬

mnfikmyhk

CREATURE MIXING 11

しるし
7/17

川鵜鶏肋

承前

？

粉雪の舞う中、矢車の隠し蔵へと忍び込まんとする。

斗流の内部肅正組織たる樞。その総司令である芳村黒男は完璧主義者だ。彼の作り上げた警備網は鬼斬り達への対応も考慮されたものであるし、そもそも樞は人類への反逆者への対抗システムであり、斗流宗家の処分権さえ有している。

その通りだ。確かにその権限は今もって樞にある。だがそれが何だというのか。

北斗七鬼の頭領たる樞を宿す、斗流の至宝にして主たる彼女達を阻めるものは斗流のうちには誰一人としてない。

世の常の技や武器では無手の彼女達さえ止められるものではないし、樞が鬼神としての本来の力を発揮すれば、現存する鬼斬りのすべてが束になっても叩きつぶせる。例えさおりの揺であつても、主を滅ぼすにはまだ不足だ。

例外的に樞に対抗しようとすれば宮藤姉妹の北落師門か、クロヒメの一人である玲韻の炎の神剣だが……あれらは樞と同じ、制御困難なほど巨大な破壊力だ。その一端が顕現しただけでも珠坂の町を半壊できるような力。わずかに蛇口を捻っただけでも叩きつけるような奔流として溢れ出す。

そんなものをもってして、誰かの行動を止めるなどという使い

方は、微妙を通り越して不可能に近い。同人誌即売会の行列整理に核ミサイルは使えない道理だ。一個小隊よこしてもらえるほうがよほど有り難いだろう。

そしてそれ以上に、彼女達に対して師門やレーヴァテインをぶつけるのは危険過ぎる刺激だ。そうなれば間違いなく樞は呼応し、二つの神格の激突は全力でなくてもこの惑星を滅ぼし尽くしかねない。なにしろ彼女達自身にしながらが、常に暴走せんと脈動する樞の力を抑える事に心を砕き続けねばならない状態なのだから。他のクロヒメ達、莫耶やデュランダルあたりなら適任かもしれないが、あれらは部外者だ。わざわざ斗流内部の不和を喧伝して、この国の屋台骨を揺るがしても仕方ない。

そう、計算高いさおりや黒男が、たかが、宝物の守りごときのためにそんな無謀を仕掛けてくることはあり得ない。ゆえに迎撃の心配については無用。

ただ一つの心配ごととは言えば、決して彼に行動を悟られてはならないと言うこと。

だからこそ、彼女達ともあろうものが、このようにこそ泥じみた真似をしている。

だんだん腹が立ってきた。どうしてここまでせねばならないのか。

しれたこと。それが要だからだ。

あの芳村志摩の事だ、きっとそれなりの道具を残しているはず。そう確信している。

そして、それは程なく見つかった。

まるで彼女達に見つかることを求めていたかのように、それは視界に飛び込んできた。矢車の紋所と小さな銀色の鍵の意匠が記

された印籠。

用途不明あるいはジョークとしか思えない道具の中に紛れ込んでいたところからみても、きっとガラクタと判断されていたのだろう。だが樞を宿す彼女達の目には、きわめて高度な時間干渉の術式が込められている事がありありと分かる。

まったくどこまで準備がよいのだろうか。彼女達が失われた思い出を求めることさえ予見していたのか。

術師ではあっても鬼使いでも鬼斬りでもなかった一人の人物が、死してなお斗流にこれだけの影響力を残している。さおりや玲韻の姉貴分だけあって、つくづく底知れない人だ。

でも今は、偉大な先達に感謝しよう。

7 / 17

五ヶ瀬七夏

ある冬の朝。

詩紀ちゃんが倒れたとの連絡に、とるものもとあえず彼女の部屋に向かった。

「おう、ナナ」

彼女の兄である新川篤史さんがベッドの傍らを譲ってくれる。

「容態は？」

「寝てる」

彼女を診察していたさおりさんが端的に伝える。

「正確には、半覚醒状態で完全に目を覚まさない。身体的には十九パーセント、いえほぼ百パーセント問題なさそうだけど」

少なくとも彼女の生命や世界に危機が及んでいるというわけでは無さそうだ。

「原因は？ どちらも寝ているんですか？」

彼女の心の構造は霊的な意味でいささかややこしい。

さおりさんの言によれば、詩紀ちゃんに宿っている魂は星鬼たる樞のほか人としての詩紀ちゃんと美紀ちゃんの三つ。樞は眠り続けており、詩紀ちゃんと美紀ちゃんは適宜いり混ざって意志決定に影響しているとのことだ。

「樞は相変わらず休眠中。まあ起きてたら大変なことになるけど。あと二人分の魂の反応はあるけど、どうも活動性が悪い感じね」

「活動性ですか？」

さおりさんの補助をしていたメイド服の先輩、宮藤初さんが問いを発する。

「誕生してから二歳程度までの幼児に近いわ。魂との繋がりはあるのに、魂が精神活動の制御に関与してないんだと思う。三歳以降の脳の自立性は低下しているから、夢遊病に似たような症状を呈するようね。これ以上は専門じゃないから、アリスにでも診てもらわないと正確には言えないけど……コンピュータ的に例えるとなんらかの原因で通信が一時的にダウンしてたためにシステム自体がスリープに入っているような状態だから、切っ掛け次第で覚醒する可能性が高いと思う」

「例えば、心室細動にDCショックをかけるとか、精神科でやる電気痙攣療法とか、そういう感じのものですか？」

初さんと同じ顔のもう一人のメイドさんが物騒な事を言い出す。「終はいつもながら鋭いわね。身体ではなくて精神に対するショックという点では、大きな違いはなさそう。覚醒にたる

だけの精神的刺激を与える事で魂サイドとの通信量を増加させれば、強制的にリンクを再確立させられそうなのね」

相変わらず遠回りなさおりさんの説明に気をせかさながらも、こういう時こそ冷静さを失うべきではないと自戒する。

「具体的にはどういった方策が？」

放った問いに対し、さおりさんが眉を寄せる。その表情の意味するものは、呆れか。

「言わずもがなだろ」

「言わずもがなですね」

「右に同じ」

篤史兄さんが、そして宮藤の双子メイドさんが一斉に、期待のこもった眼差しで見つめてくる。

そして篤史兄さんはやりと笑みを浮かべ、

「古来より、姫を目覚めさせるのは王子様のキスと決まってる」
なんてのたまった。

「「キス、キス、キス！」」

さおりまで一緒になって、手拍子と足踏みでブレッシャーをかけてくる。

「こらそこ、ビデオ構えるな！」

初さんは準備良すぎ、ソツなさ過ぎだ。

どうにも風向きが悪い。

十悟兄さんではさおりさんを抑えられない。七瀬の双子に救いを求めたところで、あの子達は間違いなく同調する。

斗流唯一の良心と思えた結香さんまでもが煽りに参加している以上、七夏に逃げ道はなかった。

「おまえさん以外の誰にそれができるよ？」

確かに篤史兄さんの言うとおりだ。それに、別に詩紀にキスしたくないわけではない。

七夏自身の思いとは関係なく、そうせざるをない状況に追い込まれるのがシヤクなだけだ。それで彼女を救えるなら意地など引つ込めれば済むこと。

「ああもう、分かりましたよ。やりますよ、やらいでか！」

これまでの実績からして、現状についてのさおりさんの見立てについては信用すべきだろう。それで詩紀ちゃんはずっと目覚めるに違いない。

問題は、本当に大丈夫なのかという点だ。

七夏は詩紀達に好かれているはずだ。それは確信している。

だが、人事不省のところにキスを仕掛けるというのは人格を無視する暴挙だ。彼女達に少しでも嫌がられれば、樞の覚醒にさえ繋がりかねない。自分がそこまで信頼されていると言い切ってしまうのは思い上がりではないか。

集った先達の顔を見渡す。

誰も彼も、ただ面白がつているだけに見えた。

この人達がこの深刻な状況を理解していないはずがない。七夏にはその資格があると、信じて疑っていないのだ。

「どうみてもラブラブです。本当にありがとうございました」

七夏の背を押すように、篤史兄さんはそう言い切った。

自分ではなく、彼らの見る眼を信頼するべきではないか。

これまでだって彼らの示す方向性はおおむね間違いなかった。

多分に結果オーライなところはあったが……

そう覚悟を決め、うつろな目で天井を見上げる詩紀の顔の上にかがみ込み、

「起きて、詩紀ちゃん」

唇が触れあわんとする直前、目を閉じようとしたその瞬間。詩紀の両の眼に意志の光が宿った。

直後、七夏は予想外の攻撃に襲われる。ベッドを支えにした諸手突きで身体が浮き上がったところに、左の回し蹴り。

男性としては恵まれている方とは言えない七夏の身体は二連撃をまともに食らい、抜け目なく体をかわした篤史の足下へと蹴り落とされた。

七夏が何とか回転受け身をとって立ち上がった時には、詩紀はベッドの上に身を起こし、半身に構えている。

驚いて反射的に手が出たにしても、仮にも彼氏に対してこの仕打ちとは、身震いするほかない。仮に未遂でなければこんなものでは済まなかっただろう。

金輪際、他人の判断に命を預けるのはやめよう。反省。

「なに、どうして、なんで？」

銀髪の少女は混乱の声を発しつつも周囲を見回し、首をひねりながらも状況を把握する。

「あっちゃん、さおりさん、ういちゃん、ついちゃん……もしかしてユカちゃん？」

詩紀が目覚めた事にはっとしたのもつかの間。彼女の漏らした言葉にまといつくこの違和感は何なのか。

その正体はすぐに判明する。

「誰、この人？」

七夏を見た詩紀は、胡散臭い物でも見るような目つきで、そう言い放った。

「うあああああああああああ」

心が折れる音が聞こえた。自分の身体が膝から崩れ落ちるのを感じつつも、止められない。

ORZ

「つかあ、そう来たかった！」

篤史兄さんがこめかみをおさえて苦笑する。

「刺激が強すぎたんでしょか？」

「それとも、七夏さんのことを忘れたくなるぐらいの事件が？」

「なにに、もしかして原因自体がナナなの？」

「ナナも隅に置けんなあ」

「こういうときには早めに謝っておいた方がこじれないよね」

嫌な感じの視線が多数突き刺さってくる。結香さんなんて言葉は優しいのに、何も聞かないうちから完全に有罪扱いだ。

信頼なんていっても所詮はこんなものか。

「機嫌損ねたのなら謝るよ。これ、この通り」

彼女は難しい娘だ。いつ何時何に引っかかってヘソを曲げているか分かったものじゃない。とりあえず頭を下げておくにこしたことはない。

「……何言ってるの？ この人」

詩紀は篤史兄さんに視線を向ける。まるで助けを求めるかのよう。

冗談を言っている雰囲気ではない。彼女が冗談を言うならもっともつと悪辣なはずだ。

「おいおい、マジかよ」

篤史兄さんもさすがに気づいたようだ。

「おまえ、ナナの事がわからないのか？」

「あっちゃん」

秀麗な眉を寄せ、詩紀ちゃんは怒りの表情を浮かべた。

普段のクールビューティーっぷりが嘘のような激怒っぷりに、ターゲットとなった篤史さんだけでなく、七夏も宮藤の双子も一歩後ずさる。神経が魔力強化されているに違いないさおりさんや、空気を読む能力が完全に欠如している結香さんが羨ましい。

華奢な両拳を血が出そうなほどに握りしめ、震える声で絞り出すように言う。

「……ふざけないで」

感情を自制しているわけではなさそうだ。激怒のあまり、まともに発声もできないといった様子に見える。

七夏にとっても、こんな表情の彼女を見るのは初めてだった。

何が気に障ったかはともかくとして。常日頃の詩紀であれば表情も変えずに痛烈な皮肉の一言でもぶって相手を黙らせているところだが。

今詩紀が放っているのは、おそろしく純度の高い怒り。まるで小さな子供が見せるような、損得勘定のない、不快を与えるモノに対する単純で純粹かつ闇雲なそれ。自分が敵う相手かどうか、相手に責任があるかも、そもそも生物であるかすら意に介さない、そういった種類の怒りだ。

爆発寸前の癩癪、と言い換えてもいいだろう。しかも、手が震えるため導火線に点火できずにいる。

コミュニケーションの中で自分の立場を理解するにつれ、ここまです直接的な感情表現はそうそう見られなくなるものだが。

この懐かしさと不快さはなんだろうか。

どうにも、気に入らない。

「ねえ、のりちゃん」

さおりさんが言葉を発する。淡々と感情を交えずに。機械的に事実関係を告げる刑事か判事か何かのような口調で。

「あっちゃんはお馬鹿だから何も知らないだけ。のりちゃんを責めるつもりはないのよ」

怪訝そうな表情ではあったが、詩紀が小さく頷く。と同時に、激怒の表情が、半ばまで畏れにとってかわられる。

七夏を認識できないほど混乱している彼女も、姉貴分のさおりさんには一目置いていよう。

心外そうな篤史さんを一瞥で黙らせつつ、さおりさんは続ける。「ナナも撫菜^{ベネツツリ}鈴菜も無事よ。五体満足すぎるぐらい」

「本当？」

言葉の意味はさっぱり分からなかったが、さおりさんの言葉は魔法のような効果を示し、詩紀ちゃんの表情は困惑と安堵の混在したもの塗り替わっていた。

常日頃の彼女とは違い、面白いぐらいはつきり顔に出してくるので、実に分かりやすい。

「ただ、見た目はだいぶ変わってるわ。そこに立ってるお姉さんみたいのが、今のナナ」

そう伝えられた詩紀ちゃんの表情に、困惑の成分が一気に増える。

「納得できない？」

首を縦に振る詩紀ちゃん。それはそうだろう。納得できないの意味が真逆だが、七夏にとっても同じだった。

「つまり、どういう事？」

ストレートにそう問うてみると。

「あの事件直後に戻ってる」

答えはきわめて端的で。

「医学的に言うとは逆行性健忘。いわゆる記憶喪失」

それにしても。いつもの事ながら、さおりさんの察しの良さは異常だ。

そう言われてみれば納得だった。篤史兄さんに対する『あっちゃん』、という呼び名は、随分長いこと聞いていなかったものもあるし。

彼女の関わる事件といえは枚挙にいとまはないが……あの、という枕詞に相応しいものはそう多くはない。

かつて七夏が珠坂を離れる切っ掛けとなった、十年前の事件にちがいないだろう。

事件によって直接に影響を受けたのは撫菜・鈴菜の双子を含む七瀬家、そして七夏自身であるが、詩紀についても無関係とは決して言えない。いや、むしろ彼女こそが中心にいた。七夏がそれを知ったのはつい最近のことであるが。

ともあれ。今の詩紀はあの事件以降の記憶を失っており、彼女の精神は七歳の時点に戻っている。

さおりさんの説を鵜呑みにすれば、そういう事になる。

否定する材料は今のところないばかりか、先ほど感じた不思議な懐かしさと不快さの正体を説明できる。少なくとも、感覚的には納得できる。

それにしても解せないのは、原因だ。

「ちょっとちょっと。私は神様じゃないわよ」

さおりさんの解答は、あっさりしたものだった。

「まあ、仮説だけならいくらでも。単純な仮説では、まだ精魂との接続が完全でない、というのが一つ。もっとややこしい仮説も

あるけど、これはまあ、今は口にすべきじゃないわね」

枕元に転がっていた、女子高生の持ち物としては渋すぎる印籠を矯めつ眇めつしながら、苦笑含みにさおりさんはそう言った。

何のヒントもないところをみると、いつもの勿体ぶりではあるまい。彼女がそう言うのなら、本当に今は聞くべきではないのだろう。なんだかんだ言って、さおりさんは気を使ってくれている気がする。

「そういうわけで、ナナちゃん」

「はい」

さおりは印籠をパンツのポケットに仕舞うと、七夏の詩紀と手を取り、互いに握りあわせた。

「面倒ごととは私達に任せて。納得いくまで一緒にいてあげて」

突然のことに戸惑う七夏達を置き去りに、仲間達をふりかえったさおりは、こう宣言した。

「火急の折ゆえ、姫神になりかわり斗流全体の指揮を執る」

直立不動となる一同に対し、矢継ぎ早に命を下す。

「斗流宗家の名において緊急十家会議を招集するので、初は第二位以下の本家の元へ走るように。終は見習いも含め人払い総員に第一級警戒配置を伝達。私は楯とクロヒメ達を動かせるか黒男夫婦と交渉してみる。篤史は結香を連れて自分の判断で動いて」

「……」

「……」

気まずかった。

さおり達が慌てて退室していった結果、記憶喪失の詩紀ちゃん

と手を繋ぎあったまま、二人つきりで取り残された。

「おかしい。さおりさんも、あっちちゃんも、ういちゃんもついちゃんも。それにユカちゃんも。みんな何か変」

「それはそうだろうね」

詩紀ちゃんが最近の記憶を失っているのなら、記憶の中の彼らとは年齢が合わないはず。結香さんに至ってはまるであの頃の面影がないから、彼女と分かったことが不思議なぐらいだ。

「それに、みんながナナだっていうあなたが一番変」

七夏の手を払いのけた詩紀ちゃんが、凜とした表情で睨みあげてくる。知らなければとても中身が子供だとは思えないだろう。

だが、揺れる瞳には、見知らぬ大人に対する警戒の色が混ざっている。

手助けを断った詩紀ちゃんはスリッパにぎこちなく足を通すと、一息にベッドから立ち上がるようにして、直後にバランスを崩した。

「！」

「おっと」

間髪入れず、腰に手を回して支える事に成功。

なんとなく予感があった。それで間に合ったようなものだ。

「……ありがとう」

小声の、でも間違いなくお礼の言葉。

「どういたしまして」

なにしろ、十年前の詩紀ちゃんの精神にとってみれば、手足の長さも体重も視線の高さも全然違う。別人の身体を使っているようなものだ。

身体の方が動かし方を覚えているだろうが、記憶の中の感覚との間で何らかの齟齬が出てもおかしくない。

自由な方の手を何度か握ったり開いたりして、そのあまりのぎこちなさに詩紀ちゃんは眉をひそめる。

「おかしいのは、私の方なのね？」

「……今のところは」

まずは自分の感覚だけを信じて観察した結果、その自分の感覚こそが最も信じられないとの結論に達してしまったのだろう。

ただ聡明というだけではない何かがある。

理屈で理解できても、感情的にはそう簡単に信じられるものではない。中身が本当に小学二年生相当だとすれば、器量が大きいを通り越して異常の域だ。

やはり彼女の中には七夏の知る詩紀がいると、そう確信する。ならば、助けるのは七夏の役目だった。

「大丈夫、心配いらない。僕が何とかする」

「その上から視線が気に入らない」

握り返す詩紀ちゃんの手には、ぐっと力がこもる。

「でも、今はあなたに任せる」

今は知らぬ顔である七夏が一時の信頼を置くに足ると判断された。人見知りが強く、しかも他者に手厳しい彼女にとっては、最大限の譲歩に違いなかった。

その貴重さをしるからこそ、感謝の言葉が口をつく。

「ありがとう。光栄だよ」

「……べつに」

そう言っつてぶいと明後日の方を向いた詩紀ちゃん。いかにも彼女らしい反応だった。

ともかく、混乱する彼女に警戒されて逃げ隠れされるという最悪の事態だけは避けられたわけだ。ひとまずは喜ばしい。

さて、彼女を元に戻すために何ができるかだが。思考を巡らせ始めた時に、手を引かれた。

「さ、行くわよ。ナ……お姉ちゃん」

見知らぬ人物を友人と同じ名で呼ぶ気にはなれないのだろう。

その妥協点が、お姉ちゃん、であったと。

お兄ちゃんじゃないのは不満だが、贅沢ってられる状況ではない。こんなのは七夏が我慢すればすむ程度の瑣事にすぎない。

我慢、我慢。

落ち込む心に活を入れ、平静を装って尋ね返す。

「どこへ？」

「情報を制する者が世界を制するの」

ボキャブラリーは十七歳相当のままなのか。

「どこへなりともお伴しましょう」

自分がおかしいと感じていてなお、自分の目で状況を確かめようというのだ。

記憶を失ってはいいても、詩紀の意志は最大限尊重してあげたい。十年前の七夏とは違って、襲いかかる理不尽な脅威にたた翻弄されるだけではないのだから。

昨夜の冷え込みようとはうってかわって今朝は冬としては比較的暖かい方だが、それでも通学にはコートを手放せない。

すぐに、同じ制服の少女三人組と合流した。

「おはようー詩紀様」

「おはようございます、詩紀さん」

「はようん、姫」

快活な同級生、やわらかな物腰の上級生、ぶんぶんと手を振る小柄な下級生。

こちらは有名人二人なので一方的に見知られてることも多いが、この三人とは毎朝のように会っているだけあって、みな見覚えのある顔だ。数秒検索すれば名前を思い出せる程度の間柄が。

「っ!!」

詩紀ちゃんは七夏の腕にしがみつき、がちがちに緊張した表情で見上げてきた。常日頃の自信満々な彼女らしからぬレア顔。

これは失敗だったかもしれない。

いつも通りの日常、という彼女のリクエストには確かに一理あると思った。同じ行動をとることが記憶回復の呼び水となればとも考えたが……いきなり見ず知らずの人間の興味を集めるような状況では刺激が強すぎたか。

とはいえ今更そんなこといっても後の祭り。精一杯のフォローに入る事にする。

「心配ないよ。同じ学校の生徒だから」

「こっ怖がってなんてないわ。ただちょっと驚いただけ。そんなの、見ればわかるもの」

抱きつかれた腕に震えが伝わってくるが、気づかなかったことにしておこう。

「そうだね」

「……むー」

なだめられたはずの詩紀ちゃん是不機嫌さを隠さない。

見透かされていることがわからない彼女ではないから、子供に戻っても取り扱いが難しいには変わらない。

しかし。

自分は一体何をやっているのか、と七夏は自問する。

刺激を与えて本来の記憶を取り戻させるのが目的のはずなのに、詩紀ちゃんの顔を見ていると、どうしても決意が鈍る。怯えさせるより不機嫌にさせる方がまし、と。つついそう動いてしまふのは甘さゆえだろうか。

「あのう、一つ質問よろしいですか？」

三人組が彼女の詳しい事情を知るはずもないが、その態度は同じ気持ちで喚起したようだ。少なくとも直接つっこむべきではない、と。

「五ヶ瀬さんはどうして、ええと、女子の制服を？」

一番年かきの少女が、奇妙なやりとりに気づかなかった振りをしながら、別の話題を振ってくれた。さっそく効果が出たようだ。衆目を集めるには奇抜な方がいい。こうして詩紀から目をそらすための話題ぐらいにはなるし、うまくすれば彼女の異常さも一連のものとして扱われるだろうと期待しての事である。

夏の件でクロゼットには女物の衣装が多数用意されていた。なぜか紫城高の冬服とそれに合わせたコートまで。初さん終さん、いつもの事ながらやり過ぎ。

「そこは気にしないでくれると助かります」

おかげで作戦は確かにうまくいった。うまくいったのだが。こんなに悲しいのはどうしてだろう。また何か大切なものを失ったような気がする。

「……はあ、お察します」

よく分かりませんが、またカノジョの気まぐれにつきあわされてるんですね、と目が語っていた。

いつも引っかけ回してくれる篤史さんたちに感謝すべきなのだろうか。やはり釈然としないが。

「だーいじょうぶ。むっちゃ似合ってる」

「一分の隙もない女の子だね」

「あははは、そりやどうも」

愛想笑いを返すと、脇腹をつねられた。

「通学中によそ見しない！」

「ごめんなさい……それではみなさん、ごきげんよう」

突然活動的になった詩紀に引きずられるような形で、否応なしに先を急ぐ。

朝は一人で立ち上がることもできなかったのに、短い間に身のこなしがずいぶんとスムーズになっている。さすが本人、そしてさすがの運動神経。

まだ腕力のコントロールは効いていないようだが。勢い余って七夏の腕まで握りつぶさないでほしいものだと切に願う。

「大変だねえ」

「お姫様と侍女みたい」

「言葉遣いまで女の子になってね？」

三人の声がドブラー効果を伴って後から聞こえてくる。この勢いで迷わず進めるところを見ると、通学路は完全に覚えているのだろう。

目が覚めたばかりの時点で、篤史兄さん、さおりさん、宮藤姉妹、それに姿形が全然変わってしまったっている結香さんまで認識できていた。詩紀ちゃんの記憶は完全にリセットされている訳じゃない。

対して、現在の七夏のこととはまるで認識できていない。

幸い、さおりさんの推薦も含めてある程度の信頼は得られたようだが、それとこれとは別問題だ。

彼女が何を覚えていて、何を覚えていないのか。それを探ることが詩紀の記憶を取り戻す鍵となるかもしれない。

そんな事を考えながら教室に入った途端、

「し、詩紀様が、見知らぬ美人になつてゐる!？」

「五ヶ瀬だよ、クラスメイトなら分かつてよ!」

「……つて、分かるかあ!」

一斉に駄目出しされた。

この直後、クラスメイトに対する認識もほとんど全滅状態である事が判明。

彼女のことだから、もとより覚えていなかった可能性もあるので、あまり参考にはならないが。

幼い心の詩紀の安全に注意を払いつつ、観察を続ける事にする。

芳村睡蓮よしむら すいれん

家を出たくない、と渋る大輔だいすけを強引に引きずり出した。

「異界からの干渉が著しく活性化している現在、霊的に防御されたこの工房からの外出は危険すぎる。魔王の顕現も近からう」

「やかましいわ残念男。せめて怪異探知機としてぐらい役立ってみろや」

この男、さえない見た目には裏腹に、斗流に伝わる伝説の星鬼しやうきたる尚書憑きと目される超重要人物。高位精魂の干渉によるトランスバースドリフト現象を認識できるウルトラ希少能力者。

何かといえど中二設定での自己欺瞞に走るヘタレだけだ。

「そもそも、あれはどう? ドリフトしてる?」

「いや、なんというか、常識的に考えて完全にアウトでは?」

「……そうね。いくらなんでもカッパが非常識に大きすぎる。改変されたと考えるべき」

「睡蓮基準フレアじゃ大きく見えて当然じゃないか?」

「ああん?」

「流れてる。間違いない」

「よろしい」

魚やオタマジャクシが降る現象をご存じだろうか。

空から降ってくる大量の下着というのはその亜流と言ってもいいだろう。

話だけ聞けば怪奇現象の類だが、実際には珠大の女子寮を竜巻が直撃しただけのこと。物理的に起こりうるただの偶然、と言えどそれまでの出来事だが……

歴史の横行ドリフト現象、つまり偶然ではなく何者かの意志に従って引き起こされた奇跡であるとすれば、これこそ玲韻さんや宗家代理がおそれていた状況に違いない。

問題の寮はたまたま全員出払っていた状態であったため怪我人がなかったというのは幸いなのだが、そこにかえって不自然さ、意志の介在のようなものが感じられる。

おそらくは、斗流の本尊たる白銀珠比女命しろぎんたまのひめのみことの意向、なのだろう。その名が珠坂の地を、さらに言えば全国の霊的場を統合する人工的な複合意志体と与えられた仮想的な概念であることは、斗流

十家の末席に身を置くものとして睡蓮も知悉している。

この国の霊的中心である珠坂に敷かれた方陣は、住人それぞれの精魂の意志と力を統合し、管理者たる斗流宗家に集めるように

なっている。管理者の意志が集約された力に正しい方向性を与え、運命干渉により最大多数の最大幸福を実現する。そもそも斗流という組織はそのサポートのためにつくられていると言っている。しかし……

ひとたびコントロールを失うと、一つ所に集められた力はコントロールを与えられないまま、重要性の低い雑多な願いに反応し、無作為に実現し始める。

「さしずめ、ギャルのパンティーを所望した馬鹿者がいたのね」
宗家による統御が完調なら、そんな個人的かつナンセンスな願いや叶えられる筈がないのだが。

詳しくは知らされていないが宗家の詩紀姫が不調だというから、彼女の支配の網の目をすり抜けてこんな馬鹿げた奇跡が起こって不思議はない。

「間拔けた話だよ。女子寮なんか吹っ飛ばして拾える下着なんかほとんど中古品だろうし、サイズが合うとは限らないのにな。詮無統制って事か」

このお兄ちゃん、魔王だの陰謀だの連発してる割には、意外に世間ずれしていない。きっと根が単純なんだろう。

「……実に正しく願いを叶える気がするけど。方法がイカれてるだけで」

「だが、他人を傷つけてまで入手したいってわけじゃなかったんだろ。そういうところは潔しと褒めてやりたい」

「……」

かつて睡蓮が固有能力である茨の園で無意識のうちに死を撒き散らしていた事を知っているばかりか、自分も命を落としかけたというのに。身内に対するデリカシーが足りなすぎだ。

手口についても、睡蓮の解釈は異なる。

願い主はそこまで考えてないだろう。どうせ、自分で目的を達成する力もその過程で犯罪者になる覚悟もないネクラだ。

きっと、詩紀姫の意志が人死にだけは出ないようにしているのだろう。不調だというのにそこまでの責任は果たしているのだとすれば、それこそ天晴れとしか言いようがなかった。

何はともあれ、ばかばかしい事件に成り果ててくれたのは良かった。このぐらいの規模の干渉なら睡蓮一人で十分リセットできるだろうが……大輔の妄想を具現化して、異界から魔王とその軍勢を呼び寄せたりするような事がなければと切に願う。

「とりあえず中二病自重しろ」

言ったところで、某ロープレのラスボスの壮大なテーマ曲がチープな音質で鳴り響く。

「もしもしこちらダイナス。丈司さん？」

電話の相手を確認したところで、大輔の背筋がびしっと伸びる。元ヒッキーで現中二病という駄目人間の大輔に対し、あちらはイクメンで文武両道のやり手生徒会長にして、ただの堅物というわけではない清濁併せのめる器量の持ち主。

普通なら接点もまずなければ価値観的にも絶対に合わないようなタイプだが、実際にはこれで互いに一目も二目もおいて尊敬し合っている様子だから、端から見ていると実に奇妙だ。

……まさか、うほっというわけでもないだろうが。丈司さんにはお似合いな美人の婚約者いるし。

そもそも、うほっ的にも相当不釣り合いな気がする。どっち掛けのどっちでもあり得ないカップリングということで、そんなレアな可能性を心配しても仕方ない。意味のない思考はこのへんで

終了にする。

「了解。女子寮爆発の件を取捨次第直行する」

漏れ聞こえる会話内容から察するに、他でも無作為なドリフトが起こり始めているのだろう。

運のいい人間は、都合のいい未来を呼び寄せるように適切に行動しているように見えるものだ。しかし実際には、魂の備える意志が、自分の行動を含めた偶然の選択に方向性を与えているのだという。そして、より強力な魂は歴史そのものや物理法則の再編成・作り直しを行う場合さえあり、これはトランスバースドリフト現象と呼ばれる。

人々の魂を束ねてより強力な魂として扱い、積極的にドリフトを起こして利用するのが斗流の核たる白銀珠比女命システムだが……現状ではそれが暴走中で、それこそどんな異常な変化が起こるか分らない。

ドリフトをこえて記憶を保持できる（あるいは不器用すぎてドリフトに適応できない？）ゆえに世界の変動を認識できる大輔は、こういう場合にこそ重宝される。正確には、彼無しではまるで話が進まないと言うべきか。

ある意味でこれは非常に恐ろしいことだ。

彼により異常と判断された場合、睡蓮達クロヒメの干渉力をもって意識的に再ドリフトを引き起こし、より平常に近い世界に修正することができる。できるのだが。

この修正プロセスにおいて、異常を認識するのも、変更すべき内容をクロヒメに伝えるのも、正しく修正されたのかを確認するのも、どれもこれも大輔一人の判断。彼の正しさについては誰も確かめようがない。大輔以外の意識や記憶は、ドリフト後の状況

を歴史的に正常なものと認識してしまうのだから。

「で、竜巻って現象は大輔の記憶にある？」

睡蓮としては、こういう質問をせざるを得ない。

「風が渦巻いて物体を巻き上げるって現象でいいんだな？ それなら、滅多に起こるものじゃないが、ただの自然現象だ」

大輔が語る竜巻は、睡蓮の認識と一致する。

「つまり、大規模な書き直しの必要は無いのね」

「偶然を引き寄せた程度で実現可能な望みだったんだろうな」

何十万年前のプレート移動に干渉してこの国の気候を書き換えたり、新しい気象現象なんぞを作り出したのでないなら幸いだ。

そんな無茶なレベルの再改変は、さすがに睡蓮一人の手に余る。

なに、馬鹿げてる？

その通り。

この大輔の発言が妄想や演技でないとは証明できない。しかし十家の各本家までもが彼を信じることにしている。普段の発言にさえろくに信頼を置けない、この口から出任せ男の発言をだ。逆に言うならば。この国の本当の中枢で、能力も権力も判断力も十分以上に備えた人々が、妄想癖の中二病の言いなりになって振り回されざるをえない状態なのだ。

もし仮に。

演技で斗流を好きな方向に動かして世界を都合良く書き換えさせているのなら、こいつは希代の詐欺師で悪魔的頭脳の持ち主と言うことになるだろう。

そのようなことを考えていると、普段人前では決して見せないようにしている、嘲笑としか言いようのない表情が自然と浮かんでしまっって困る。

正直、ありえんし。

そんな可能性よりも、丈司さんとウホッの方がよっぽど現実味があるではないか。

大輔は間違いなく馬鹿者の類だ。そこは理屈ではなく確信できる。計算ずくで器用に立ち回るのに長けた睡蓮とはまったく違う。もしそうであれば同族嫌悪で苛立たされない筈がないのだ。自分に近い詐欺師タイプを相棒としてチームを組むなど睡蓮的にはあり得ないし、そうであったとしてもとうの昔に決定的に決裂しているに違いない。

脳内設定の異世界の勇者を人前で名乗ってしまうような単純バカは、物事を単純に安直にしか見られない。そんな大輔だからこそ、尚書なんてトンチキな星鬼に憑かれるのだ。

たとえこいつが自分より賢い詐欺師であったとしても、その時こそすつきり見限ることができるわけで。きっと清々するに違いない。

「じゃあ、それなりの願いなら一つだけ叶えてあげる。さあ、願いを言いなさい」

「細部は任せるから、建物も中身も生活可能な状態に。気の毒なお姉さんたちが路頭に迷わないようにな」

親指を立てて、いい台詞でも吐いたつもりらしい。まったくお子様だ。

睡蓮的には別に手間は無い。状況を想像し、そうであったらいいな、と強めに思っておくぐらいのものだ。

歴史変化がうまくいったかどうかは睡蓮自身にもとんと分からない。世界が変化したという実感もないのだが。

「たやすいことよ」

だからこそ、成功率向上のためにどっかの龍神様の台詞を借りて、少しでもその気になっておくのが良いだろう。

「よし、オーケー。いつものことだが見事なものだな、フレア」
手ぶれ防止装置つき高倍率双眼鏡で丘の上の白い建物をのぞきつつ、大輔がソウルネームとやらで呼びかけてくる。

「……この非常時に関係ない女子寮なんかのぞいてるんじゃない！ 早く扇戸さんとこ急ぐわよ」

「おう」

なんですつきりやり遂げた顔してるんだ。腹立たしい。

扇戸丈司おうきとじょうじ〈

校門前に急停車したタクシーから、珠附紫城高の制服姿の少年が飛び出してきた。

「丈司さん！」

いかにも不自然な状況を前にただただ手をこまねくしかなかったところ、待ちに待っていた人物の到着だ。

「一つ、戻してきたところっす」

と、秘密兵器は親指を立ててみせる。

「さすがだな。お疲れの所申し訳ないが、大輔君には早速もう一働き頼みたい。ちょいと目を貸してもらえないか？」

続いて降車してきた小柄な少女に会釈。相棒を借りるのだから、それぐらいの礼儀は必要だろう。

「こんなんでも良かったら、いくらでもこき使ってやってください。」

レンタル料とか一切合切不要なんで」

瞬間的に意向を読み取った睡蓮嬢が、大輔を両手でずいずいと押し出してくる。

「まあ、俺なんてそれぐらいしか取り得ないから」

「それは謙遜のしすぎだろう」

当の本人は頭をかいて苦笑しているが、うちの使えない婚約者様の事を考えれば、邪気眼系中二病なんて可愛いものだと思うが。「で、ここに何が？」

睡蓮嬢がそう問うてくる。

「君はこの光景に違和感を感じないか？ 知識として理解できて、心が奇妙だと訴えないか？ 何か感想は？」

体を開いて手を振り、下駄箱の並んだ昇降口を示す。

「……これはひどい」

「相撲部屋？」

大輔・睡蓮嬢がそれぞれ一言で惨状を表現する。

「十代女子の一部において、体重が急激に増加して表情筋の異常を来すハイティーンバルーニング症候群は、この地方の風土病としてつとに知られている。娘ぶくれという土地の言葉もあるぐら이다。しかし……」

そこには、帰宅の途につく者、体操服に着替えて部活に向かう者、十数人の女生徒の姿がある。

誰もかれも、なんというか、丸い。

寒くて着ぶくれている分を計算に入れても、丸すぎる。

計測したわけではないのだが、平均体重は八十キロを上回っているだろう。

一般的には太っていてもイコール醜いとは限らず、愛らしさを

感じさせる魅力的な女性も多々いるものだが……彼女たちの容姿は控えめに表現しても水準以下だ。しかも表情は様に暗く、活気の乏しさが若々しささえ著しく損なわせている。

命には特に別状がないのに容姿だけを損ない、思春期の少女をねらって降りかかる皮肉な不幸。まったく気の毒としか言いようがない。

しかし、これが誰かの意志の反映結果であるとすればどうだろうか。

「本校の女子のほぼ全員が罹患というのは、確率論的にゼロでないとしてもかなり特異な状況と判断される。どうだい、大輔君」
「……ミッシェン系の元お嬢様学校が、目も当てられない状況に成り果てて……」

啞然とする彼の反応からすると、どうやら正解だったようだ。

「こりゃ魔女のバァさんの呪いか？ ……っ！」

集中する恨み妬み嫉みの視線に、剛胆な睡蓮嬢も耐えきれず大輔の陰に隠れる。気持ちにはよく分かる。

ただでさえ妖精じみた繊細な美少女の睡蓮嬢だ。こんな所にいればそれは風当たりも強い。

しかし、今のはおもしろい例えだ。白雪姫に嫉妬した王妃がもっと強力な魔女なら、こんな方法をとっていたかもしれない。自分をより美しく、白雪姫を醜く、だ。

「となると、犯人はこの学校の女生徒の可能性が高いな。ハイティーンバルーニング症候群を発症していない、むしろ容姿が自然に優れた女生徒」

「鉄塊あすかさんとか議長じゅんさんとか？」

睡蓮嬢は皮肉な笑みを浮かべてそんなことを言うが、大輔が一

笑に付す。

「その人たちはもともとすっぱー美人だし、その気ならとくに自分でドリフトさせてると思うぞ」

丈司の認識も大差ない。

デュランダルクロヒメである三条樹菜は可憐な容姿とは裏腹の老成した風格を漂わせる飄々とした人物である。

アスカロンのクロヒメである佐倉明日香の精神年齢が容姿の件で他人に嫉妬するほど大人なら、相棒たる丈司の心労もだいぶ減るだろう。まあこれは言うまい。

「まあ、原状回復できるのなら犯人捜しなど意味がないだろうがね」

断罪なんてものは回復も補償も不可能な場合の代用手段でしかないし、そもそも嫉妬心自体は罪ではない。願いを具現化する異常事態にこそ責任がある。

問題は元から断つべきだが、それについては師匠や五ヶ瀬氏に任せておけば、じきに払拭されるに違いないからう。

「万が一に備えて、彼女たちには目立たないようにしてもらっている」

「それ、賢明な判断です」

ゴスロリ系ファッションに包んだ自分の身体を抱きしめるようにして、睡蓮嬢がカクカクとうなずく。

「ここは速やかに合流して、三人でさっさと再改変しちゃいません？」

多数の嫉妬を一身に集めるような事があれば、彼女自身まで改変されかねない。さしもの白銀珠比女命システムも不完全な状態でクロヒメの抵抗力を上回るのは簡単ではなからうが、かといっ

て自分を実験台にしてみるつもりにはなれないだろう。

「全面的に賛成だ」

「やるのはいいとして、知りもしない元の姿にどうやって戻せばいいの？ まさか他校の女子まで全員顔覚えてるとか言わないでしようね？」

詰問調になる相棒に、大輔は不思議そうな表情で答える。

「それって、元に戻す必要があるのか？」

「は？」

何を言っているのか理解できないといった表情が、睡蓮嬢に感ずる。

「この場合別に正確さには意味がないだろ。彼女たちの理想像に近づける感じでいいじゃないか」

「……きみはじつにばかだな」

意図を悟った睡蓮嬢は、大きくため息をつき、肩をすくめてみせた。

「慈善事業じゃないのに、よその女子を元より綺麗にさせてどうすんの」

「フレアはそれで何か困るのか？ 別に困らんだろう？ ドリフトさせる手間は同じなんだから」

「……いや、まあ。ね。それはそうだけど」

理屈では確かにその通りだが、睡蓮嬢は歯切れが悪い。丈司には彼女の気持ち想像できなくもないが、大輔は空気を読まず続ける。

「この国を見守る立場にありながら防ぎきれなかった、しかも力不足で正確に元に戻してやれない。罪の意識から逃れるためだと言われればその通りだが、せめてそのぐらいの償いはさせてくれ

ないか。俺の自己満足、わがままだと思って協力してほしい。前世からの相棒と見込んで頼む、この通りだ」

確かに社会生活を送る上では欠点だらけの人格だが、時にこういう事を自然に言える彼は尊敬に値する人間だ。だからこそ、こうして対等の友人として付き合えることを誇らしく思える。

「そういうカッコつけた台詞は鏡見てから言え！」

照れ隠しのように突っかかる睡蓮嬢の様子は見ていて微笑ましい。

「だがその意気やよし！ この睡蓮さんがこの学園を世界一の美女の園に変貌させてくれるわ！」

小柄な少女らしからぬ勢いで、独裁者よろしく拳を打ち振って宣言する彼女の背後から影が迫る。

「感動しました！」

長身の娘が上から覆い被さるようにして睡蓮に詰め寄り、両手を握りしめる。

「不肖、佐倉明日香。全力でお手伝いさせていただきます！」

「うわびっくりした！ ……って、いつから居たの？」

「わたしはいつも会長さんと一緒にですよ？」

「はいはいごちそうさま。しかし、ゆるキャラの癖に油断ならんなこの人」

「……なあ丈司さん、もしかして」

大輔に首肯を返しておく。

彼だけが異変に気づいたと言うことは、ドリフトによる探知回避実験は計画通り行われ、しかも成功した事になるろう。

精魂工学の第一人者アリス・シュテンバース博士の言によれば、トランスバースドリフト現象による世界相間の移行は、時を超え

た存在である精魂にとっても不可逆な出来事だという。すなわちドリフトとは精魂にとつてのもう一つの時間の流れのようなものであると、丈司はそう理解している。霊的なもう一つの時間軸に沿って、これまで書き換えられてきた無数の歴史が並んでいると言い換えてもいい。

かのシュテンバース仮説においては、精魂の意向による前向きな運命選択は、単純・あるいは単層ドリフトと呼ばれている。思考プロセスにおける神経回路への干渉といった極小のナノドリフトから、団扇で嵐を呼ぶ天狗の技に至るまで。規模の差に関係なく、精魂による積極的な未来選択はこの単純ドリフトに分類される。

一方、複雑ドリフトあるいは複層ドリフトと呼ばれる現象は、精魂による過去への干渉による現在の選択と言い換えられよう。

数秒から数十年単位の短期間を遡って運命を選択し直す浅層ドリフト。あるいは数百年から数千年単位を遡る深層ドリフト。数万年から数億年の過去に干渉する超深層ドリフトといったものがこの複雑ドリフトに属する。

究極的な全層ドリフトで宇宙開闢の条件にまで干渉できれば、おそらくは物理法則をさえ変化させうる。ここまでくればもう創造神の御技のレベルだが、理論的には存在が予言されているものだ。

ハイティーンバルーニングという風土病がドリフトによって発生した（正確には、風土病の存在する世界相へと移行した）とすれば、何らかの病原体あるいは遺伝子異常が発生してこの地に定着したものと考えられるから、深層ドリフトに相当するだろうか。ともあれ。時間軸に縛られない精魂にとっては、単純ドリフト

も全層ドリフトも本質的には違いがないだろう。しかし、目標となる時相から改変起点が離れる（すなわち深いドリフト）ほど小さな干渉で大きな変化を起こせる一方、精密なコントロールが難しくなり難易度が上がるはずだ。つまり、どの時点に対して干渉をはかろうとも、起こせる変化の大きさは精魂の格、すなわち演算に使用できる精魂回路の規模によって左右される事になる。逆に言えば、ドリフト前後の世界の差が小さい、単純なドリフトほど成功しやすいに違いない。

そこで、丈司は仮説を元に一計を案じた。

鬼憑きやクロヒメのような強大な存在の感覚を出し抜くのは難しいし、そんな相手の感覚や記憶をドリフトですり替えることはさらに困難だ。しかし、同意を得た味方の状況を書き換えるならば遙かに簡単な筈だ。

ならば、絶対安全な場所に居た事により誰にも見つからなかったという結果を得ておき、その結果だけを流用し、ずっと傍にいたが偶然見つからなかったという状況へとすり替えるという方法も考えられるのではないか。

そういうわけで、モルモット代わりになってもらった睡蓮嬢には悪いが、いつか草薙剣のクロヒメが使った手をアレンジして、明日香に試してもらったというわけだ。

なにしろ、無意識とはいえ力業での解決に慣れているクロヒメたちはおおざっぱだ。丈司や麻鈴嬢など、緻密に頭を使う人間も必要だろう。

強大な精魂のせめぎ合いの中では多少の技術を磨いた程度の丈司など無力だが、戦略的な頭の使い方なら彼の出番もあるはずだ。そういう意味では、ここで仮説が証明できたのは大きい。今後の

展開次第では彼らにとって強い武器となりうるだろう。

同じく実験を頼んであった三条嬢の方が合流してこないところをみると何らかのトラブルがあったようだが、成功率五割なら決して分は悪くない。クロヒメが二人もいれば局地的な深層ドリフトを取り返すことは十分可能だろう。

「では睡蓮嬢、明日香、大輔の言うようにしてくれないか」

「りょーかい」

「はいっ」

突如、大輔が親指を立て、

「グッジョブ」

といい顔で言った。

「完璧っすよ」

わけがわからない、と言いたところだが……想像はつく。自分たちは先ほどから異常なドリフトの片付けに回っているところだが、現在の所この浅葱谷高付近ではまだ何の異変も関知されてはいない。

だが、異変センサーたる大輔の発言からすると、どうやらつい今し方、睡蓮嬢と明日香によって世界の再構成が行われたとみえる。

丈司自身にとっても、実際に再ドリフトを行ったであろう睡蓮嬢や明日香にとっても、異変は別の世界相、霊的過去で起こっていた出来事にすぎない。であるから自分たちには何が起こったか知るよしもないし、どんな異変をどう改変したのか、その過程でどんな会話がなされたかも闇の中。記憶にないことで褒められて

もなんとリアクションして良いか分からない。

「??」

「と、当然ね」

訳が分からずただニコニコしている明日香に対し、訳もわからず鼻高々な睡蓮嬢。クロヒメ達の顔立ちには共通する雰囲気があるのに、体格や性格はまるで違っているのがおもしろい。

このドリフトという現象、理屈は頭に入れていたつもりだが、こうして実感してみるとなんともどこかしらいものだ。正確には、理屈できてもまるで実感できない。

そして、恐ろしい可能性に気づいてしまう。

丈司が生まれてから十数年の間に、一体どれほどの回数の大規模ドリフトが繰り返されてきたかなど神ならぬ身には想像もつかない。だが、深層ドリフトの数回もあれば我々の文明を一変させるには十分であろう。

とすれば、大輔の口走るファンタジックな世界観がこの世界のトランスバースドリフト軸、つまり霊的過去の姿であったとしてもおかしくない。それを認めざるを得ないというのは、なかなか複雑な気持ちではある。

そんな事を考えていた時、ポケットの中の携帯電話が振動とともにスラブ舞曲第二番を奏でた。

発信者は『飛成麻鈴』。

「こちらゲオルギウス」

『ウィズです。勇者殿もそちらにいらっしやいますね？ 仔細は後ほど、ともかく珠坂大附属病院の外科外来棟まで至急お願いします』

「了解した」

待たせてあったタクシーに全員で乗り込み、運転手を急かす。「珠大病院まで大至急。言い値を商工会まで請求してください。信号はすべて青にさせます」

「……学生さん達、訳ありだね」

髭の運転手はにやりと笑い、

「よっしゃあ、いっぺんこういうのやってみたかったんだ！」

言うが早いか、ノリが良すぎる運転手の操るタクシーはタイヤをきしらせて急発進する。

バックミラーの中、後部座敷の大輔が転がり、隣の睡蓮嬢に抱きつく。

「聖者さん、らしくもなく何をあわててるの？」

顔を真っ赤にして大輔に蹴りを入れつつ、さすがに疑問を表明する睡蓮嬢。

「何も心配はありません。会長さんに任せておけば万事大丈夫ですからね」

激しく揺れるタクシー内でも、明日香はいつもの上品な所作を崩さない。あたかも彼女の周囲だけは時間の経過が遅くなっているかのようだ。

しかも、何の根拠もないし説明にもなっていない。

「鉄塊さん、相変わらずね……」

「大学病院で何があったんですか？」

大輔に問われるが、丈司には何も答えようがない。

「詳しくは聞かされていない。だが、史上最高の魔法使いの一人があれだけ急いでいるんだ。本当の緊急事態に違いない」

「話の意味はよく分からんが、とにかく急ぎなんだな」
そう請け合った運転手がさらにアクセルを踏み込む。

「急いでいただけるのは有り難いんですが、くれぐれも安全運転で」

さしものクロヒメでも自らの死は覆せないだろうから。

「まかせとけ！ 昔の血が騒ぐぜ！」

一抹の不安は残るが、ここはプロの技を信じて任せるほかかならう。

「お任せします」

竜胆大輔

目的地の珠大病院まで本来であれば二十分やそこらはかかるところ、タクシーは路地裏を猛スピードで突っ切り、なんと五分フラットという大記録を叩き出した。豪語するだけあって、運ちゃんは大した腕だった。

その代償として、大輔は降車する頃には半死半生。

見た目によらず運動神経抜群の睡蓮や、いかにも鍛えあげている丈司さんとはかく、お嬢然とした明日香さんまで平然としているのに、この体たらくとは情けなくなってくる。家にこもっていた期間が長かったので、予想以上に身体がなまっているようだった。

「なっさけないわねー」

睡蓮がにかつと歯を見せて嘲笑する。明日香さんや三条さんの上品さを少しぐらい見習ってもいいとも思うが、その気になればいくらでも淑女らしい振る舞いができるはずだ。

「面目ない」

「しかし、この渋滞は何の騒ぎなの？」

大病院の正面玄関前ロータリーには何台もの救急車や自家用車やタクシーが群れをなしており、とても門前まで乗り付けられる状態ではなく、ずいぶんと手前で降車する羽目になってしまった。

「なんでも朝方に高速で多重バス事故があったとかで、それで大量に患者が運ばれてきてるらしいよ。車両無線が鳴りっぱなしだ」とは運ちゃんの弁。

「嫌な予感がする。動けるなら急ごう。外科外来棟だ」
「了解」

外科外来棟の正面ホールは何十人という怪我人で埋め尽くされていた。大ホールは簡易的な治療スペースに早変わりしており、何人もの医師や看護師達が忙しく立ち回っている。

苦痛の悲鳴、歓喜の声、絶望と悲嘆の涕泣が入り混じり、そこはあたかも阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

目の前で今まさに小ドリフトが連続発生している。大輔にはその様子がはっきりと見て取れる。

シートに寝かされて呻きをあげている怪我人の傷が恐ろしい速度で癒えていく、いや消えていく。

小さな傷は消え、大きな傷は何か別のモノによって置き換えられ、致命的な傷を負った者は命を必要とせぬ存在へと変貌していく。

鬼に堕ちるという現象はあり得ない出来事ではない。ただ頻度が異常なだけだ。ここまで連鎖するのは奇跡的な確率と言っている。だが人を救わんとする癒しの奇跡とはまるで別のものと感じ

られる。

忙しく働く医師や看護師達はどうした異常を気にしている様子はない。目の前で起こっている異常事態に対して感情をシャットダウンし、職業意識とプライドだけが機械的に身体を動かしているものか？ いや、彼らもすでに何か別のモノに成り果てているのではなからうか。

不完全な鬼憑きはたちまち暴走し、あたりの人々を襲っては新たな怪我人を発生させる。動く死人は次々と生者の命を奪い、新たな動く死人へと変貌させる。

この奇っ怪な現象の根幹をなすものは、ただ一つの感情だ。目の前の光景からは、この地を支配する思いがはっきりと伝わってくる。

白銀珠比女命はきつと、ただただ死を嫌悪しているのだ。

しかし例え彼女の力をもつてしても代償なしでの死者の蘇生は難事だ。だからこそ、身体の不調を鬼で置き換え、それで不足ならば動く死体に変えてでも、死という現象を回避しているのだから。

こんなものは神の与える救いなどではない。自らの非を認められない神の逃げでしかない。見たくないものを遠ざけては先送りにした結果、何ともおぞましい結果を顕現させてしまった事になる。

「死への恐怖が姫神の意志と呼応して、さらに不完全な死を再生産するなんて。なんとも皮肉な話ですね」

気持ちは同じなのだろう。パークのフードを深々とかぶった小柄な少女は、細めた笑い目のまま嫌悪感も露わにそう言い放ち、迫り来る不死人をねじくれた杖で突き倒す。

ウィザードこと飛成麻鈴。アーサー王の属性を備える飛成麻鈴の妹にあたる。大輔とともに姫神を守って共闘した事もある間柄だ。

「悪く思わないでよ、君らを救ってやりたくない訳じゃないけど、妖精郷の外じゃこのぐらいで限界なんだ」

淡い色の癖ッ毛、日本人離れした顔立ちの美少年が、軽やかに鉄扇を振るい、また見事な合気の技で半鬼や不死人を投げ飛ばす玲韻さんから聞いている要注意人物情報とつきあわせてみるなら、遠澤学園の妖精王子こと盛岸隆平に違いない。

「うちら所詮は脇役だし。与えられた役柄の中で動くことしかできないんだもんね。ほんと、残念だわ」

ふわふわのロングヘアに甘ロリファッションのこれまた小柄な少女は、二本のピコピコハンマーを得物に殴る殴る。

こちらは乙姫ちゃんこと二見美々だ。

さも悔しげに語る二人に対し、麻鈴が懐疑的な言葉を投げかけた。

「他人を焚きつけては暗躍するのが趣味のあなたたちが、こうやって表舞台に出てくる気になったのはどういう風の吹き回し？」

「ん。棋譜が荒れるのは大歓迎だけど、ゲーム盤が壊れるのは捨て置けないからね」

「麻鈴ちゃん私のだもんね。危なくなったらさらって逃げる」

いかにも妖精的な気まぐれな発言に、麻鈴は苦笑を返す。

「そんな事だと思った」

とても荒事に向いているように見えない三人は、そうして軽口をたたきながらも防波堤となって外来棟の入り口をかため、既に入者ではなくた者達を食い止め続けていた。

彼らに倒された半鬼や不死人は、たちまち重傷者や遺体に立ち返る。エクスカリバーのクロヒメの関連精魂たる彼らも、絵莉華さん当人には及ばないまでも相当の精魂格の持ち主だというし、いづれ劣らぬ大魔術師・大妖精の属性を受け継いでいるという。相手の意識を失わせつつ直接接触することで効果的に抵抗を破り、強引にドリフトを仕掛けているに違いない。

やっていることはまるで死神同然だが、いわば呪いを解いて本来の状態に戻しているだけだから非難される謂われはないだろう。だが、せっかく本来の怪我人や死体に戻った者達も、しばらくの間にまた半鬼・不死人へと変貌してしまふ。

なにしろ白銀珠比女命の意志はこの国全体を支配しており、珠坂という都市はその中心部だ。彼女の支配域内においては、姫神が死を厭えば死すら死するほかない。

これではいつになってもキリがない。それどころか、むしろ見舞いの人々や職員達を襲ってはどんどん増殖していくばかりだ。この院内の全員が生ける死者に成り果てるのも時間の問題だろう。「フレア！」

緩く沿った鋸状の刃を備えた黒い片刃剣を携えた睡蓮が、大輔の声で歩を止める。ダインスレイフを抜いたということは本気で力を使う気らしいが、領域に死をもたらす彼女の固有能力は乱戦では使いにくい。今回のような状況では余計に問題を悪化させるのみだろう。そのことは彼女自身も自覚しているようだった。

「わかってるわよ。どつき付き倒すだけにしとく」

傍らでは丈司さんが眼鏡を外しながら素早く進み出、持ち歩いていた竹刀袋から愛刀童子切を取り出してはいる。

「とりあえず今は動きを止めればいいのだろうか？」

「相変わらず話が早くて助かります、聖者さん」

麻鈴の返答を待つこともなく、丈司さんは一瞬の躊躇もなく地獄へと踏み込むや、手近な不死人に峰打ちを食らわせる。

守護聖人の属性を持つとはいえ普通の人間の彼にはドリフト戦術なんて無茶なまねは出来ないが、気闘法と呪術を巧みに組み合わせて複合拘束術式を編み上げ、傷を負わせないようにして無力化をはかっているようだ。

丈司さんの剣術は手堅いが緻密で、なにより威風堂々。新川さおり女史の弟子だけの事はある。

同じような感想を覚えたのだろう、美々が感心の声をあげる。

「さっすがは竜退治の聖人の名に恥じない王者の剣ね。藍ちゃん・どりすちゃんといひ勝負じゃないかしら」

「それはもう、私の会長さんですから」

全然役に立っていない明日香さんがなぜか得意げだ。まあ、大輔自身にしても人のことは言えないのだが。

「ところで、そのお二人はどちらにいらっしゃるの？」

「ん」

美々がピコハンで示す先、ホールから続く診察室の並ぶ廊下の端に、非常口を守って立つ二つの人影。

藍ちゃんと呼ばれたところを見ると、右翼を固める凜々しい少年は伴藍四郎だろう。槍のようにモップを構える姿さえ一幅の絵画のように決まっている。相方の矢上泰斗とともに遠澤学園高等部のサッカー部でツートップを組んでいる有名選手で、同クラスの妖精王子とならぶ人気者でもある。

左翼を受け持つのは、すらりと長身の娘。おでこ出し縦ロールのお嬢じみた容姿の彼女は刀浦どりす。そのゴージャスな見た目

とは裏腹に、将棋部にその人ありと言われた天才棋士の顔を持つ。二人はともにモップの槍を構え、あるいは払い、あるいは突き、あるいは殴りつけ、暴走するモノ達をリノリウムの床に這わせていく。

彼らの動きは殺伐とした戦いの技術であるにもかかわらず、目を惹きつける華麗な舞のようにさえ見えた。剛と柔とスタイルこそ異なるものの、いずれ劣らぬ見事な腕前で互いに隙をカバーし合い、絶妙のコンビネーションで不死人を寄せ付けない。大輔同様に純粋な技術である気闘法による麻痺攻撃と、狭い廊下という地の利を最大限に生かし、殺到する多数の敵を押しとどめている。

「……凄いな」

大輔として斗流の一員として人払いの儀の訓練は受けており、格闘戦で一般人に後れをとることはないが、彼らの腕前は別格だった。

今なら玲韻さんの言っていた意味が実感できる。藍四郎・ドリすが麻緒や絵莉華のクラスメイトなのは偶然とは思えない。魔法使いや妖精達のような人間離れた力は使えずとも、彼らもまたエクスカリバーのクロヒメに連れられて顕現した関連精魂、双壁の円卓騎士に対応するといわれるのも納得だ。

正面玄関でも丈司さんと睡蓮が戦線形成に参加した結果、戦線の幅と厚みを十分に稼ぎ、不死者の脱出・ひいては外部への波及を有効に阻んでいる。

「助かりました」

さしもの麻鈴も少し手を休める。肉弾戦は彼女本来のスタイルではないが、相手を倒すのが目的ではないので強力なエリア魔術

を使うわけにもいかないのだろう。

しかしこれではキリがない。

不死人は疲労せず動き続けられるが、こちらは次第に消耗する。しかも誰一人として傷を受けるわけにはいかない。

ただの人間に引けをとるようなメンツではないが、不死化した人間の力は損傷を厭わない分増強されているし、鬼憑きは鬼の固有能力を使ってくる。現に口から火炎を吹いたり、片腕が鬼の豪腕と化したりなんてモノが結構な割合で混ざっており、妖精に傷を負わせられるだけの破壊力を備えている。抵抗を破られる可能性は高くはないだろうが、円卓の騎士やら妖精王やらクロヒメの不死化暴走なんて事になろうものなら始末に負えない。

戦力はこれでも決して十分とは言えないのだ。

我慢しきれなくなつて参戦しようとする大輔を、丈司が制する。

「頼むから引つ込んでいてくれ！」

「でも丈司さん！」

「馬鹿なの？ 死ぬの？」

相方にまでコピペで罵倒されてしまった。

「だが状況が厳しいのは確かだ。三条君達の姿が見えていないところを見ると、ほかのクロヒメは応援に呼べないのだろうね」

「お察しの通りです」

丈司さんの疑問、いや確認に麻鈴が答える。

「ここが最も大規模ですが、事故現場という事故現場、病院という病院で同時多発的に同じ事が起こっています。斗流の鬼斬りや他のクロヒメは各所の病院に、人払いや柵の方々は町中に散って怪我人の封印保護に回ってもらってます」

「天叢嬢も？」

「テュルフィングも、です」

「なんと、まあ」

かつて直接敵対した事のある（ドリフト前の話だが）草薙剣のクロヒメ天叢渚沙は、放っておいても主の支配すべき国の秩序を守るべく勝手に動くだろう。だが彼女に任せては、堕ちた人々を躊躇無く消し去りかねないであろう事は既に学習済みだ。しかるべき人間（莫耶の高天萌衣か、デュランダルの子三樹菜あたりが適切か？）をブレイキ役に配しておかないと大変なことになりかねない。

テュルフィングのクロヒメ、鶴居垂米の名が出たのは丈司にとっても意外だったらしい。

彼女は星の御光教という新興宗教の巫女として要塞のような本山に匿われており表に出てくることはないが、同教の教祖昂師とともに数々の事件の裏で糸を引いていると疑われている曰く付きの人物だ。彼らの真意は今もって分からないが、少なくとも現状に対しては同じ危機感を持ったからこそ、共闘を申し出てきたのだろう。

明日香、絵莉華、萌衣、樹菜、渚沙、睡蓮、玲韻、垂米。八人のクロヒメ全員が曲がりなりにも一つの目的のために力を合わせるというのはまさに快挙だ。

しかし、その超絶的な力を全面的な防衛戦闘に振り向けるしかない状態。これが危機でなくて何だというのか。

大規模な事故だけが問題ではない。世の常の病気で死に瀕しても、ただ転んで怪我を負っただけでも、ゾンビや墮鬼化の切っ掛けとなるのなら。傷と死にあふれたこの世界は、死を厭う女神の意志によって簡単に地獄に変じるだけの土壌をもとより備えて

いる事にはならないか。

こうしている間にも死せぬ死者の数は増え続け、武力では彼らを押しとどめることは難しい。完全な解決のために必要なのは女神さえ為し得なかった病死労苦の根絶だ。栄枯盛衰の法則は魔王さえ手出し困難な創造神の領域である。

想像以上に危険な状態だ。なにしろこの戦いには勝利条件が見あたらない。死者の元になる生者をすべて消し去るのが無理なら、斗流の姫神を、ひとたびは皆で守った新川詩紀を消すぐらいしかない。守るべき白銀珠比女命を自ら手に掛けることは斗流という組織・思想にとっては自殺も同じであるが、それでもこの国自体を見捨てるよりはマシだろうから。

もちろん、大輔にはそんなことは出来そうもない。睡蓮にも無理だろう。玲韻さんも豪快そうに見えて情が深い。

だが天叢渚沙や鶴居垂米、それに櫛の司令官芳村黒男氏や、詩紀の後見人たる新川さおり女史はどうか。必要とあらば姫神を切り捨てられるのではないか。

大輔はらしくもなく、何かに祈った。

「……五ヶ瀬さん、あんただけが希望だ。お姫様と世界を救ってやってくれ」

陸奥十悟

「まさかこんな真冬にヘリで山頂とはな。天候急変したらマジ命に関わるぞ」

帰って行く救難ヘリを恨めしそうに見つめながら、十悟はこちた。

「大丈夫よ。今は誰も彼も死にくくなってるから」

同じく完全防寒装備の新川さおりが答える。

「ま、死に損なったら大変なことになるけど」

まさにその死に損なった人々が珠坂中で着々と仲間を増やし、今にも市中にあふれ出そうとしている。

ここは深い雪に覆われた珠古山頂。斗流の守る石塚、古代の雪の女神である天陸花媛命の封印の場のほど近くだ。

「状態に変化なし、か」

「そいつあ良かった」

「残念ながら媒介になる今代の雪娘はまだ見つかってないから、正攻法での解除は難しいわね。揺に塚ごと吹っ飛ばしてもらおう必要があるかも」

さおりがとんでもないことを言い出しやがった。

「……詩紀の制御力低下に伴う封印の弱まりを懸念してたんじゃないかったのか？」

「ん、むしろそれを期待してたんだけどね」

と、こともなげに言い放つ。

「これ以上不死者も鬼憑きも増やさないためには、まるまる固定封印してしまるのが確実。文字通り凍結ってわけ」

この女相変わらずだ。確かに理にかなってはいいるが、これはとてつもなく荒っぽいやり口だ。

万物を凍り付かせる危険な祟り神を解き放ち、不死者も鬼憑きも生者もひっくるめて、日本列島ごとクールドスリープさせようというのだ。

自分自身の安全すら考慮してない、まさに大博打。しかもほぼ独断。こいつ医師免許持ってるくせに、説明も同意もあつたもん

じゃない。

「運が良ければアリスあたりが何とか解除方法をみつけてくれるんじゃない？」

だが、もちろん最終手段だろう。さおりとて決してこんな手段を使いたい訳ではないはずだ。

「で、ゴー・ノーゴーはどうやって判断するんだ？」

それを尋ねてみると、

「現場で指揮とってるウィズ女史に一任。だからあんたはさっさとそれ組み立てる！」

「了解」

命じられるままに衛星電話のセットアップを行いながら、十悟は苦々しさを含んだ懐かしさを感じていた。

「やっぱり十年前と同じか」

十悟が見たところ、状況はかなり近い。

不幸な事故で七瀬夫妻が亡くなり、リンペン双子と七夏が重傷を負ったあの頃も、人々の無意識の危険な祈りが無造作に実現される状態となっていた。

詩紀の精神的成熟が霊的国家守護システムの中核としての役割を曲がりなりにも果たせるだけのレベルに至っていた事と、それを完全に成し遂げるには不十分であった事が最大の要因だ。

十年間の記憶を失っている詩紀の精神年齢は、当時と同じ七歳児相当という事になる。さおりが即座に総動員を掛けたのは、当時と同等の状況に陥る可能性があるかと判断したからだが……

「いいえ、認識が甘かったわ。あのときのノリちゃんは感情を殺してたから珠坂から遠ざければそれで済んだけど、今回はノリちゃん自身が積極的に願望を送り込んど見た。そうでなきゃド

リフトは単発にとどまって、ゾンビ映画状態になるほど徹底はしないでしょうね」

その差がどこから来るものかは分からないが、さおりの説が正しいなら実に厄介だ。

彼女は本来であればこの国に安定をもたらす希望だ。相当の犠牲を許容しても彼女だけは失うわけにはいけないが、この国自体と引き替えるようでは本末転倒だろう。

だがそんなこと以前に、詩紀は十悟にとっては主であると同時に、教え子であり妹のようなものだ。感情的にはとても切り捨てられるものではない。

「馬鹿なことを考えるもんじゃないわ」

それはさすがのさおりにとっても同じなのだろう。だからこそ、既に封印していた化け物を野に放ち、詩紀と国をひとまとめに封じるという心中じみた策まで準備しているのだ。

「今のあの娘は一人じゃないのよ」

前言撤回。判断に個人的感情を含めるほど甘い女じゃなかった。そして彼女の指摘はもつともだった。

十年前の詩紀は素直にさおり達の言うことを聞き、珠坂から離れることを了承してくれた。

だが……今の混乱し警戒しきった詩紀の排除をはかるならば、奇襲の一撃で確実に息の根を止めるしかなく、それに失敗すれば樞が解放される危険性がある。頼もしいボディガードである五ヶ瀬七夏がついている中で、そんな真似が可能とは思えない。

鈴菜・撫菜の双子と同様、七夏もまたあの事故で一度壊れている。頭部の損傷で運動・感覚言語野とともに破壊された彼は、通訳の星鬼である九州珠口（きゅうしゅうぐち）の共生により機能を保っているらしい

（少なくともさおりはそう言っている）。

かの星鬼が与えるのは、古代から未来においてこの宇宙に存在する事になるあらゆる言語を完璧に解するという、ただそれだけの能力だ。だが本来の正確な意味を乗せられた言語は、魔術の行使における媒体として理想的なものである。最も情報効率の高い言語を完全な形で操れるというのは、最強クラスの言霊使い・魔術師としての潜在能力を備えている事に等しい。十悟が好んで使役する巻舌（けんせつ）などはまるで格が違う。

七夏がどこまで自覚しているのかは分からないが、詩紀の幾分かが樞であるように、七夏という存在の幾分かは既に九州珠口であり不可分なのだ。そして、鬼憑きの思考が完全な人間のそれと同じである筈がない。そうでなくては詩紀の傍らにあることなど不可能だ。

大切な詩紀を守るためであれば、彼は世界を滅ぼす事さえ厭わないだろう。家族や幼なじみ達を自分の手にかけるぐらい程度はまったく躊躇しないに違いない。

だが、こうも言える。この世界中で詩紀を救えるとしたら七夏だけだ。彼が出来なければ誰も為し得ない。

「そうだな、あいつに託すか」

「そうね、準備が無駄になることを祈ってるわ」

いかにもさおりらしい。

なんだかんだ言って教え子を信頼していて、ハッピーエンドになる事を信じているからこそこんな無茶が出来る。と言えればいい話のように聞こえなくもない。

額に鬼の角が見え隠れしていなければ、だが。封印塚、壊しちゃいけないと言われると、どうしても壊したく

て仕方ないのだろう。

「頼んだぞ、ナナ……俺じゃこいつらは止められん」

どうにか我慢できている間に何とかして欲しいものだった。

七夏

午前中の二時限分を使って高校中を回ってみたが、記憶回復につながる切っ掛けになりそうな手がかりは何一つとして見つかる事が出来なかった。

「授業中にお手々繋いでデートとは良い御身分だね、ん？」

無人の廊下で生活指導係の先生と遭遇してしまふ。

立場としては当然の発言だが、詳しい事情を説明しているような時間はない。やむなく真剣さをアピールすべく精一杯真摯な態度で視線を返すと、

「……こほん。こういうのは今日だけだぞ」

と、目こぼししてくれた。互いに信頼する心さえあれば、言葉など費やさなくてもちゃんと伝わるものだ。と心が温くなる思いだった。

しかし、後に聞くとところによれば、この先生は同僚に「あの時は殺されるかと思った」と涙ながらに語ったそうだ。ほんと、人は簡単には分かり合えない。

閑話休題。

彼女は中学時代は珠坂にいなかったはずだし、記憶が小学生時代に戻っているのだから、いっそそこからたどり直す手もあるかもしれない。

詩紀ちゃんは先ほどからいかに居心地が悪そうにしていた。

実感として此処には誰も知り合っていないわけだから、もっともだ。

その点に関し、しばらく彼女と過ごしていて少しかつたことがある。彼女の症状は普通の記憶喪失とはちょっと違うようだ。

記憶自体がないわけではなく、知識はあるのにどうしても実感できない。もう一つの淡い記憶と内容が食い違うというのが実際のところらしい。そのため、人の名前や自分との関係は分かっても、とてもそうとは感じられない。その違和感が彼女を苦しめている。

なぜか年嵩の教師についてだけは違和感が無いらしいが、逆に七夏に対してはどうしても認めたくないという気持ちが極端に強いのだという。

嫌われているとは思いたくないが……例えばそうであっても七夏の気持ちは変わりはない。

「悪いね、もう少しつきあって欲しい」

こういう無理強いもしたくないが、今はそんな事を言っている状況ではなかった。

タクシーをつかまえて、隣の台地にある珠坂大付属小に向かう。

小学校内と周辺を一通り回り終えても、詩紀ちゃん表情は一向に晴れない。

当たり前だが彼女はここでも友人に会うことは出来なかったし、彼女にとって認識に無理のない教師達も震えあがって平伏するばかり。

詩紀ちゃんは当初の強気な態度（空元気だったのかも）を次第に失っていき、ついにはほとんど声も発しようとしなくなった。元の彼女に戻るどころではないし、少なくとも良い傾向とは思えなかった。

そんな間にも時間は刻々と経過する。

まだ誰からも何の連絡はないが、朝のさおりさんの劍幕からして、間違いない事態は切迫している。この珠坂において詩紀ちゃんの制御がはずれた状態が安全であるはずがない。

『君待つと我が恋ひ居れば我が宿の簾動かし秋の風吹く』
風の精を役として情報を収集してみる。

“珠坂は黄泉比良坂を転がり落ちつつある” “根の国が刻々と近づいてくる” “イザナミの八雷将の軍勢が迫っている”

冬の風では精度が不十分で些細な意味までは把握しきれないが、この町を覆う異常のほどは十分異常に伝わってくる。

一刻も早く彼女を元に戻さねばならないが、その成否は七夏の手腕に掛かっている。

『いざいかに深山の奥にしほれても心知りたき秋の夜の月』

同じく、秋の歌でどこまで及ぶかは分からないが、詩紀の額に掌をかざし、心の状態を探ってみる。

やはり手がかりらしい手がかりは得られなかったが、一つだけ分かったことがある。

詩紀と美紀の区別がつかない。こうして術を使ってさえ、二種類の別々の心があるように感じられない。

思い返してみるなら、昨年再会するまでは二人目の存在を感じたことはなかったのだから、十年前の時点では詩紀と美紀の役割が分化していなかったわけだ。

つまり、新川詩紀としての記憶とともに、人を超えた者としての立場を冷静に演じ樞の巫女の役をこなせるだけの余裕も失われてしまっている事になる。

どう考えても非常事態だった。この状況で起こりうることを想定してみると、どう控えめに見積もってもろくな想像にならない。ともかく、何とかして元の二人に戻さねばならない。

今度はより直接的にアクセスを試みる事にした。

詩紀ちゃんと隣り合って小学校中庭のベンチに座り、両手をつなぐ。

『たつね行く幻もがなつてにても魂のありかをそことしるべく』

多少の危険を伴うが、二人の魂を探り当てるため、魂の感覚を身体感覚に変換して送り込む。

のたくる触手に覆われた（？）海の臭いのする（？）精魂（きつとこれが樞だろう）は直視すると正気度とか消耗しそうなので無視しておくとして。

残り二つの精魂が詩紀ちゃんと美紀ちゃんに対応するのだろう。

「……？」

だが、これはどういう事なのか。

形（？）が違う。

七夏の知る詩紀の精魂はたとえて言えば銀色に光る大きな金属球、同じく美紀の魂は半透明な水晶の剣山のような形に見える（？）のだが、

今七夏の視界（？）の中にあるのは、互いの周りを回り合う二つのパチンコ玉。

いつかさおりさんが語っていた。精魂は本質的に時間に縛られ

ない存在だが、どの時相から観察するかによって現れ方は異なる。魂は時間に向かって投影されているようなもので、立体を投影する角度によって影の形が変化すると同様なのだそうだ。剣山の向きをどう変えればパチンコ玉になるのか分からないが、あくまでも例えなのだから、魂をくるりとひっくり返して裏返せばそんな風に見えたりするのだろう、きっと。

細かい理屈はともかく、二人の魂の区別がつかない状態になっているのは明らかだ。とすれば、精魂の投影状態が十年前に近い形になっているのかもしれない。言い換えるなら、脳を含んだ身体に対する心の時間が狂っている、とでも言うべきか。

なんとなく現状がつかめかけてきた気はするが、続かない。魂を元通りにくるりとひっくり返す方法など見当もつかない。

「くっ……」

弱り果てた。

中学校を調べてみるとという名目で詩紀ちゃんを金沢あたりまで連れ出せば、とりあえず問題は先送りに出来るだろう。

しかし、それが彼女の回復につながることはとても思えない。先ほどの彼女の反応を見る限りでは、この搜索はむしろ彼女の心を追い詰めつつあるようだ。

さらに追いつめていけば何か劇的な変化を呼び起こすかもしれないが、七夏の直感はその危険な賭だと告げている。

こんな事を続けていけば回復の可能性を永遠に失わせるばかりか、この幼心の詩紀さえ失うことになってしまうのではないか。

「お姉ちゃん」

少女が久々に声を発した。

記憶の中の彼女の声はこんなに弱々しかっただろうか。ほんの

昨日のことなのに、もう記憶に自信がない。

もしや、これもまた、ドリフト現象の一種なのだろうか。

最初は異常に感じられた変化に対して、皆の記憶は遅れて書き換えられていく。そして記憶の書き換えが終了したとき、それが既定事実となるのだ。とすれば、七夏は今まさに詩紀が消えてしまいう場に遭遇しているのかもしれない。

「……ううん、ナナなんだっけ」

その台詞で現実引つ張り戻された。妙なことを考えるな。錯覚だ。思い過ごしだ。

「うん」

「やっぱりおかしいのは私なのね。別の世界の自分の中に紛れ込んでしまった気分」

七夏を振り返った詩紀は、冷たささえ感じさせる絶世の美貌に、らしからぬ力のない薄笑いを浮かべた。

なんといいっても実際の世界は雄弁だ。かくも立て続けに食い違いを見せつけられてしまっただけは、いかに頑固な彼女をしても自分がそが異物であると認めるはか無かったのだろう。

「リンペンが元氣だったのもどうしても納得できないし……」

「まあ、確かにあの子達は元氣だけだね」

特に鈴菜はちょっと元氣すぎるぐらい。あれはいつになったら落ち着くのかな。

「でも、こっちの詩紀がうらやましい」

この発言が彼女にとつての实感を物語っている。魂が七歳の頃に戻ってしまった詩紀にとっては、十七歳の自分はまったくの別人としか感じられないのだ。

そうか。あの頃の彼女は、友人達が深い傷を負い家族を失う様

子を見てしまったばかり。そしてそれを自分の責任だと認識していた筈だから。

「大丈夫、すぐに元に戻るよ」

「……」

言ってしまったから後悔した。気休めに過ぎないことは、口にした七夏自身が熟知している。

だからこそ決意を込め、改めて宣言する。

「いや、絶対に元に戻してみせる。安心して」

大切な詩紀を取り戻さねばならない。それは自分がやるべき事だ。

これは励ましの言葉であると同時に、自分を奮起させるための誓いであり、九州珠口の強力な呪力を帯びたまじないでもある。

現人神である詩紀自身が九州珠口の呪言を認め受け入れてくれれば、問題解決に大きく近づけるに違いないと思えるのだが。

「ごめん。あなたの詩紀じゃなくて」

しかし七夏の決意は少女の心には響かなかったようだ。喜ぶどころかよりいっそう落ち込んだように見える。

「そうね、私は邪魔だよね。白銀珠比女命とかもっともらしい称号を名乗ってはみても、友達を危険な目に遭わせるぐらいしかできない半端者だし」

自虐的に淡々と語る。皮肉というわけではなさそうだ。

「……あの」

「いいよ。私を消して、あなたの詩紀を取り戻して。ここにならナナにもリンペンにも嫌われていない私がいるってわかっただけで満足」

物わかりの良すぎる詩紀に困惑する七夏の前で、彼女はそと

目を閉じた。

こういうのは協力的と言えるのだろうか。七夏の意向を受け入れて、素直に協力の意志を示してくれたと考えていいのか。いや、これは諦観、捨て鉢じゃないのか。

情けない。言われるまで気づかなかったなんて。

記憶を失い心が過去にかえってしまった彼女にとって、本来の詩紀という存在は別人で。ならば今の詩紀にとって、元に戻ることは自分自信の消滅を意味する。

だが不完全な彼女の気持ちなど忖度している余裕はない。仔細はどうあれ、納得してくれたのならそれで良いではないか。

さらに言霊を重ねれば、元の彼女に戻すことは不可能ではないだろうし。

「……」

認めねばならない。七夏はそこまで強くない。

彼女のためにこの町を捧げることがは出来ても、町を救うために彼女は苦しめられない。

彼女のために他の何千万人を見捨てる事は出来ても、彼女を取り戻すために彼女の幼い魂を切り捨てる事は出来ない。

それを自覚した瞬間に、今更ながら理解する。

目の前にいる十七歳の詩紀の中に、七夏の知る幼い頃の詩紀の存在が感じられる。

今はバグってしまったてはいても、別の何かになってしまったわけではない。七夏にとっては、やっぱり大切な詩紀だ。

その大切な彼女を無意識の間に追い詰めていた。この幼い詩紀を一個の人格と認めず、否定しようとしていた。

「うがーっ、馬鹿馬鹿、僕の馬鹿！ 七夏の馬鹿！」

自己嫌悪のあまり逃げ出したくなるが、不安定な彼女を一人で放り出すわけにはいかない。

無理矢理冷静さを取り戻さんと、近くの校舎の壁に頭を打ち付けてみたり。

「ちょっと、なに？ 何なの？」

「……すまない。僕は最低だ。好きなだけ罵って」

「はあ？」

「自分を認めてくれない君を消して、自分に都合のいい詩紀ちゃんに変えたいと思ってた。詩紀ちゃんの事なんて全然考えてなかったんだ。そんなのただの我が儘じゃないか」

「いや、あの、そこまで卑下しなくても」

「ははは……そっか。なんだ、僕が一人で勝手なことしただけだ」
ただ一緒にいると、とさおりさんは言った。治せとも、治すべきともいっていない。

罪悪感と後悔とで、思考が停止する。意識がずぶずぶと沈み込む感覚に囚われるのはどれだけぶりだろうか。

「違う」

力強い言葉に、一気に現実を引き戻された。深紫色の瞳が鋭く七夏を射抜いている。

朝からのただただ当惑するばかりの彼女はなりを潜めており、口調は確信に満ちている。

「……お姉ちゃんには……ナナにはその権利があるわ」

「え？」

「あはは」
笑った。

元の詩紀に戻ったのかとも思ったが、子供のように無邪気な笑

みに違和感がある。

「覚えてはいないけど、知ってる。それに分かった。ナナは詩紀をすごく大切にしているし、詩紀達にはナナが絶対に必要だって。

だから私達のあり方を決められるのは、世界でたった一人、ナナだけ」

記憶が確かなら、彼女のこんな優しい声を聞くのは初めてだ。

樞の巫女としての立場を演じている普段の詩紀や、照れ隠しできつい言葉を放ってくる常日頃の美紀が一度たりとも見せたことの無い態度だ。

ただ吹っ切れたというわけではなさそうだが、きっと何かをつかんだのだろう。

今や、この詩紀も七夏を全面的に信頼してくれているということだろう。ならばこそ、責任はなお重大だ。

うかつにも、自分の考えの甘さで、大切な人を消そうとしていた。無意識とはいえ僕らを傷つけてしまったあの頃の詩紀は、きっとこのような気持ちであったのだろう。

「ごめん、本当にごめん」

ここにいても間違いない詩紀だ。彼のよく知る十七歳の詩紀美紀と引き替えに出来るものではない。

今この瞬間も、彼女の不調に起因する混乱を沈めるために、幼なじみ達、斗流の皆、クロヒメとその相棒達が命をかけているはずだ。彼らにはどれだけ感謝しても足りないし、彼らの力と努力をもってしても抑えきれない被害が出ていてもおかしくはない。今にでも飛び出して援護に行きたい気分だ。

だが、こと詩紀に関して七夏がブライオリティを誤ることはない。世界がどれほどのピンチであろうと、彼女が最優先だ。

まだ方法は見つけれないが、完璧な手段が見つかるまでは性急な真似はできない。

ともかく。

「ひう!？」

ベンチの上で膝立ちになり、詩紀を抱き寄せた。

さらさらのシルバーブロードを撫でながら、改めて宣言する。

「北斗の頭と珠坂の姫神にかけて誓うよ。今の詩紀ちゃんも消さない。君の全部を守りきってみせる」

むろん手段は問わない。

「うーっ」

そして、腕の中でじたばたもがいている詩紀を再発見する。

ついつい子供に対するように接してしまった。見た目は同じ歳の詩紀のまだまだが、それが自然だと感じられた。

「あっ、ごめ……うぐっ！」

鳩尾から脊髄に抜ける衝撃。これは、肘か？

なんという的確な攻撃。呼吸を封じられるのは言霊使いにとつては致命的だ。

しかし、一体誰が？ 何のために？

決まっている。

「断りもなく私に触れるのは感心しないわ」

完全に油断していたところへの裡門頂肘。ベンチに座っていないかったら必殺ものだ。

「ナナにデリカシーとか求めても無駄だし、これぐらいで許してあげる」

悶絶中のため気の利いたコメントどころか苦言の一言さえ返せるはずもなく。

あれ？

二人!?

二人いるっ!!

二人いる——っ!!!!!!

「も、げっほげほ、戻ったあ!」

「痛た! 痛いっ! 放しなさい!」

「だが断る!」

ぼこぼこに殴られてしまったけど、構うものか。

「泣くんじゃないの! 恥ずかしいでしょ!」

かくして約一日ぶりに、詩紀に罵られる幸せをかみしめる事が出来たのであった。

7/17

《詩紀》

ある朝新川詩紀が奇妙な夢から覚めると、自分がベッドの中でなんだかよく分からない状態に変わってしまった事に気づいた。

「なんじゃこりゃあ!？」

じっと手を見る。

何かが。何かがおかしい。

どうにも記憶が曖昧だが、夢の中で何かをやったはずだ。そして、どうなった。

こうって、どう？

身体が思ったように動かない。手がずいぶんとちっこい。視線

が低い。

小さいのは当たり前だ。子供なんだから。

子供？

その通り。新川詩紀は七歳児だ。

だが、やはり何かがおかしい。

「鏡」

「はい」

呼びかけるやいなや目の前に差し出された鏡の中には、見慣れた奇っ怪な色合いの生き物がいる。

「あたま」

「はい」

背後から伸びてきた手が銀髪をブラシでとかし、左右にまとめていく。

「着替え」

「はい」

ただ突っ立っているだけの詩紀に、至れり尽くせりの大奉仕。こういう上げ膳据え膳はかえって落ち着かないが、身体がぎこちない時には助かる。

「どうぞ」

鏡の中で完成しているのは造作だけ美少女。中身を熟知しているだけに全然喜べない。

それ以上に、違和感。見慣れた自分の姿を見ているだけなのに、遠い記憶の中のをぞくような懐かしさを覚える。

おかしい。ここは分かっていることを整理するべきだ。

と、もう一人の自分が思う。

斗流の宗家、白銀珠比女命。北斗の星鬼の頭たる樞憑き。そこ

までは分かっている。そのへんは納得できる。

おかしいのは、二人の意見が一致しないことだ。

さおりさんには詩紀と美紀って分けて呼ばれたけど、二人は常にツーカーで。どちらかがどちらかにアドバイスを授けるなんて事は一度もなかったし、二人を区別する意味なんてなかったし、どっちが詩紀でどっちが美紀かなんて考えたことはなかった。

でも今の二人にははっきりした違いがあるので、とりあえず自分が詩紀って事にしておけば、名前の便利さを享受できるというものか。

気になると言えばもう一つ（二つ?）。

「あなたたち、縮んだ？」

傍に控える二人のメイド、宮藤姉妹に尋ねてみる。

詩紀達より一つ年上のお姉さんの筈なのに、随分と可愛らしく感じられる。確かにこれ以上ないぐらい似合っているし、仕事っぷりも完璧なのだが、どこかオママゴトっぽい。どこが、とは言えないのだが……。

「別に縮んでいません」

「先月より一センチ伸びました」

はつきり否定されてしまった。なんとなく納得できないが、そこはとりあえず流しておく。

それより……二人とも表情が硬い。会話にもいつもの余裕がないように見受けられる。

「……まるでお通夜ね」

「それは終わりました。今日はお葬式です」

「詩紀ちゃんは昨日よりお元気ですね」

これはきつと皮肉だろう。

詩紀が事故の直接の原因というわけではないにしろ、立ち回り
ようによっては回避出来た立場だけに責任の一端は担っているの
は間違いない。

それで大して落ち込みもしないのが自分でも不思議だが。考え
てみれば詩紀は樞の名代、人間を超越した存在であるからして、
人間の感情を理解できなくても仕方ない。KY上等である。

……そうか。

宮藤姉妹にとってもリンペンやナナは幼なじみだ。あんな事にな
ってしまつて気にならないはずがない。初も終も詩紀のお付き
という立場上ここにいてくれているだけで、本音では今すぐにも
も病院に向かいたいのだろう。

そう、ナナとリンペンは怪我をしている。そういうことになっ
ていた。

交通事故、正確には崖崩れに車が巻き込まれての事故。そこま
ではさおりさんに聞かされて知っている。もう随分と遠い記憶の
ように思えるが、昨日の出来事だ。

だが、連中が命に関わるような怪我で寝込んでいるなんて想像
できない。そんなことはあり得ないと確信している。

理由などないが、姫神の直感だ。それに美紀も同じように感じ
ている。無視できない。

ここは、会いに行ってみるべきではないか。

「大学病院、行きましょう」

突然の宣言に珍しくも少し慌てる宮藤姉妹の姿を見て、ちょっ
とだけ溜飲が下がった。ざまみろ。

ちびっこメイド二人を従えて、珠大附属病院に殴り込みを敢行。
新川と名乗った途端に病院長とか名乗る頭の薄いおっさんがす
っ飛んできたが、へばり付かれても鬱陶しいのでさっさと追い払
う。

「許可だけ出して疾く去ね」

今日はずなぜか小難しい言葉を使いたくて仕方ないので不思議。

「誠に相済みませんが」

「今日の所はお引き取りを」

「はっ、ははーっ。失礼させていただきますっ！」

いかにもやり手っぽい強面の人物が孫のような小娘三人に震え
上がりながらカクカクと回れ右する様子は、滑稽を通り越してど
こか痛々しい。

こういう権力を振りかざすようなやり方は詩紀の好みではない
が、さおり姉さんが言うように権力というのは保持しているだけ
では何の役にも立たない。必要なときに使ってこそ意味がある。

それに、敬意よりも畏怖をもって扱われるというのは、鬼憑き
の頭としてはいかにも相応しいのではないか。これからは、せい
ぜいそれっぽく振る舞う事にしよう。

家族でさえ面会謝絶のところをこり押し。病院長から案内を命
じられた若い医者に続き、集中治療室に向かう。

「そちらの液体を両手に揉み込んでから、これを羽織っていただ
けますか？」

恭しく紙製のコートを差し出し彼の表情は訝しさを隠しきれ
ていないが、少なくとも態度は淑女に対するものだ。医者としての
能力についての判断は保留するが、男としてはなかなかの有様
株ではなからうか。どうでもいいけど。

「前室：クリア」

斗流の御庭番を自認する宮藤の人間はいちいち大げさだ。初が先行して自動ドアをくぐり、前室の安全を確認。終は常に背後を警戒してくれる。見てる分には痛くて面白いが、連れだと思われするのは遠慮したい。こんな時でなければ、病院内にどんな敵を想定しているのか小一時間ほど問い詰めたいところだ。病院が舞台ならゾンビかなにかだろうか。

「クリア。どうぞ」

集中治療室の中ではベッドの間を看護師達が忙しそうに動き回っている。もちろんゾンビなどはいるはずもない。

幼なじみ達のベッドは部屋の端に集められ、いかにも特別扱いでカーテンで仕切られていた。

七夏を挟むように撫菜と鈴菜が寝ている。いや、横たわっている。三人とも頭に包帯が巻かれており、びくりとも動かない。

医者によれば、鈴菜は意識は戻っているが身体を動かせない。

右目と正気を失った撫菜は薬で眠らされている。七夏はほとんど寝てばかりで、まれに目を覚ましてでもまともに言葉が出ないという。

常に余裕を忘れない宮藤の双子がそろって顔色を失うほどの惨状だった。ベッドの名札を確認しても、何人もの看護師に尋ねても、事実は覆らない。

だが、こうして実際に光景を見せられても、信じられないものは信じられない。あり得ない。美紀も同意見だ。

珠坂の管理者である詩紀が都合な光景を簡単に信じるわけにはいかない。それが例え妄想であっても、真実として確定させてしまいかねない。

逆に、たとえ現実であっても、信じたくないことは信じなければ逆転の目はある。

不自然すぎる事故の原因はどこかの誰かの無意識の願いに違いないが、悲劇を回避できなかったのは結局のところ管理者である詩紀の未熟さゆえだ。そこは認める。しかし、人の身に余るこの力も、その一端でも意識して使いこなせたならば、どうだろうか。意識して自分のために使う事など考えたこともなかったが、試してみる価値はある。

自分が樞の巫女であることをこんなに恨んだ事はなかったが、今では感謝もしている。もっともっと小さな失敗であっても、普通は一度失敗すれば絶対に取り戻せないのだから。

どうしてここまで前向きになれるのか、自分でも分からない。

だが、綺麗なお姉さんにしか見えない七夏や、元気に駆け回るセーラー服の双子の姿がはつきり想像できる。

今なら失敗する気がしない。

「初・終、あと任せる」

「お願いします」

七夏のベッドに登ると、膝立ちで身体をまたぐ。

人の気も知らずに幸せそうな顔で寝ている。まったくいい御身分だ。

思いつき身体をひねって振りかぶり、いささかの腹立たしさを込めてえぐり込むように打つ。

「起きなさい、ナナ」

すばあん。

擦り傷があるが、それでもすばらしい感触のほっぺただ。抜けるいい爽快な音がする。

さすがに看護師達の視線が集中する。宮藤姉妹も目を丸くしているが、邪魔が入らないように通路をふさぎに回ってくれる。さすが分かってる。

「人をからかうのもいい加減になさい。悪趣味よ」

七夏は嫌々をするかのように何度か首を振り、ゆっくり目を開けた。

「……？」

「ほら、私の友達がいつまでも伏せているわけがない。とっくに治ってる。さあ、何とか言ってみなさいよ」

すばあん。

返す手で右頬にもう一発。

「痛っ！だ、誰だおまえ!? 詩紀ちゃんがこんな乱暴なはずないよ!」

「失敬なっ!」

すばあん。

せっかく目を覚ました七夏が会心の一撃で意識を刈り取られる。まったく、美紀には冷静さが足りない。

しかしこれで実績イチ。いける!

「起きなさいリンリン!」

すばあん。

「……おっす、おいら鈴菜。からだが軽いぜ」

二人目。調子が出てきた。

「ペンペン!」

すばあん。

「……あれ?」

かくしてハットトリック達成。グッジョブ私。パーフェクト私!

「三人ともまるっきり元気なので退院させなさい」

「はい……ただいま手続きを」

「よろしい」

渉る主治医に無理矢理手続きをとらせておき（監視には初をつけた）、終とともに家族控え室へ向かう。

「詩紀ちゃん?」

顔を上げたのは五ヶ瀬のおばさん。

もともと線の細い人だが、ほんの一晚で随分とやつれたようだ。

「つい先ほど、ナナが意識と言語能力を回復したわ。これ以上の心配は無用よ」

「私も確認しました。じきに退院許可が出る事になっています」

良い知らせで五ヶ瀬夫妻に笑顔が戻るのを確認してから、詩紀は宣言する。

実際にはほんの小娘であることを感じさせぬよう、できるだけ威厳をもって。

「斗流宗家、白銀珠比女命として五ヶ瀬七朗しちろうならびに夏那かなに命じます。七夏を連れて町を離れなさい」

「それは、どういう?」

先に我に返ったおじさんが真剣な表情で問いを発する。斗流宗家の名が出された以上は、単なる息子の友人の言葉としては扱えないと理解してくれたのだろう。

「今回は何とかできたけど、またいつこんな事が起こらないとも

限らないから。私が姫神の力を完全に制御できるようになるまで、ナナはお二人に預けておきたい」

「……いや、そもそもうちの息子なんですが」

「それ以前に、ナナは斗流の未来を担う人物よ。私の右手として働いてもらわないといけない」

どうしてこんな事を言ったのかわからない。魂の命ずるままに口が動いた。

七朗氏はしばしの間瞑目していたが、

「だからナナは私のものと同じ。これは決定事項」

美紀がそう言い添えると、我が意を得たりとばかりに大きくうなずき笑ってみせた。

「あい分かった。息子は責任を持って珠坂の主に相応しい男に育ててみせましょう。まあ、その後は詩紀ちゃん次第かな」

「きやあ」

夏那さんは両手を頬にあて目をきらきらさせながら、こんな恐ろしいことを宣う。

「婚約ねっ！」

なんだそれは！

「……そ、そのように解釈してもらっても過言ではないわ」

ちよっ、おまつ、勝手なことを!?

暴走気味の美紀から主導権を奪い取ってフォローを入れておく。

「けど、ナナの自由意志を尊重したい」

だからこそ、ここにいて欲しくない。そこは本音だ。

無意識の望みが叶えられる珠坂では人の心や思考さえ干渉を受けかねない。詩紀達の望みであればなおさらだ。姫神にたぶらかされたナナの心を得ても嬉しくも何ともない。

七夏の親として詩紀個人の思いを斟酌してくれているであろう五ヶ瀬夫妻の厚意さえも素直に信じられなくなりそうだ。一緒に離れてもらった方がいい。

久々に詩紀と美紀の意向が完全に一致した。

「だから、それまでナナをお願い」

「任せて」

かくして、当人の意向がまったく離れたところで、とんでもない約束をしてしまったわけだが。

きつと大丈夫だ。とまたも根拠無く思ってしまった。こういう根拠のない全能感、冷静沈着を旨とすべき巫女としては決していい傾向ではないのだが。

まったく今日の詩紀はどうかしている。ナナ達が元気になったのでハイになっているといえそうなのだが、それを割り引いても朝の時点から十分におかしかった。

確かに大きな問題は解決した。しかし小さな謎が解けていない。

ちよっ、ちよっ。

病棟の廊下の角から白い手が手招きしている。

「終」

「はい……んーっ!？」

先行した終は白い手によって捕らえられ、向こう側へと引き込まれた。

いかにもこういう事をやりそうな人間はただ一人。様子を見てみれば案の定。

「うーん、可愛い。ほんと、この完成度は神よね」

「もごもごもごもご」

稲藁色の髪に黒縁眼鏡のひよろりと背の高いお姉さんが、メイド少女を抱きしめて頭をなで回していた。

病衣姿のところをみるとまた入院中なのだろう。

「あ、詩紀ちゃんこんにちはです」

「はあ、こんにちは」

芳村志摩。通称お志摩さん。

天才的術師にして蘭正部隊しきみの司令官芳村黒男の奥さんだが、詩紀達の一つ下の女の子を産んでから身体をこわし、たびたび体調を崩しては入院している。最近では病院にいる時間の方が長く、そろそろ寿命かなー、なんて不謹慎な冗談を連発している。

しかし彼女はいつも底抜けに明るく、こうやって終をいじつめる様子からは悲壮さだの諦観だのはまったく感じられない。

この人を見ているとどうしても自分の弱さを痛感させられる。

正直いって苦手だ。

「ふうん」

そのお志摩さんは詩紀をじろじろと無遠慮に観察して、

「さすが黒男さん。ちゃんと約束守ってくれるのね」

とか言い出した。

「何の、ことですか？」

このひと、さおり姉さんの師匠だけあって、いつも話が唐突でわかりにくい。

「このままだとバッドエンドは不可避だと思ったから、幸せになった詩紀ちゃんを送ってもらえるようにお願いするつもりだったの。うまくいくって分かったから、銀鍵の霊薬を完成させる気が出てきました。よーしやるぞー」

……分らない。お志摩さんが言ってる中身も。どうしてこんなにハイなのかも。

詩紀の記憶が確かなら。銀鍵の霊薬ってのは時間を超えて過去や未来を覗く呪法のこもった薬で、製法は失われて久しいはず。この人はそんなものまで作れるのか。

「で、ナナちゃんやリンペンはどう治してしまったのよね？」

「……はい」

どうしてそれを知っているのだろう。どうせ聞いても無駄だろうが。

「持続時間は半日で十分そうね」

「はあ」

「ならそろそろ戻らと思うから、未来の睡蓮ちゃんよろしくね」

……」

「詩紀さん？ 詩紀さんっ!？」

なぜだろうか。お志摩さんの、終の声が遠い。

17 / 17

七夏

「……」

ひとしきり七夏をぼこった後、詩紀ちゃんは放心状態となった。ベンチにしなだれかかった彼女の口からは何か抜けていている。

「だ、大丈夫？ 詩紀ちゃん」

「大丈夫だけど、大丈夫じゃない」

と、彼女は小声でつぶやき始めた。

「全部つながったわ……お志摩さんが言っただのはそういう意味だったのか。銀鍵の霊薬って過去を覗くものだとばかり思ってたけど。過去の自分と魂を入れ替えるなんて反則的なものだったとはね。って……ずっとそうだったのに、そうだったのはいつきってこと？ 思い出すために霊薬を飲んだのに、霊薬のおかげでそうなったって……なにそれ」

何を言っているのかさっぱりだ。
しばらく様子を見ていたが結論が出そうな様子がなかったの、で、ちょっと水を向けてみた。

「問題があるのなら、良かったら僕にも話してくれないかな。一人で考えるよりはましかもしれないよ」

若干の躊躇があったが。そうね、と詩紀ちゃんは言ってくれた。
「十年前から続いているとある感情が不思議で。どうしてもその原因が知りたくて仕方なくなってる」

「うん」

抽象的すぎてよく分からないが、とりあえず先を聞くことにする。

「矢車の隠し倉で見つけたお志摩さんの霊薬で十年前に魂をとばしてみたら、その間十年前の魂がこちらに来ていて……原因になる出来事は今日起こっていたのよ」

ううむ。

つまり、朝からの詩紀ちゃんに起こった出来事は、詩紀ちゃんにとっては過去の出来事だったことか。

さおりさんの言によれば、精魂の記憶能力は普通はごく限定的で感情のバターンぐらいしか保持できないらしいから……幼い彼女は今日の経験に伴って得た感情だけを十年前に持って帰り、そ

の後十年が経過した結果今現在の詩紀ちゃんになり、それでようやく入れ替わり中の記憶が完成したって事になる。

なんというか複雑だ。分かったような分からないような。どうもピンとこない。

「しかも、過去に持って行ったその感情があったからこそ、十年前の私は適切に行動できた……それで今、こうやっていられる」

「つまり、うまくいったんだよね？」

「でも納得できない」

と、詩紀ちゃんはおぶりを振る。

「おかしくない？ 今そうなることが決まっているから昔からそうだった。昔からそうだったから今そうなった？ 原因と結果がループしてるじゃない。因果律とか、そこらへんどうなってるの？」

「……分かりそうな人に聞いてみよう」

早々にギブアップした。

「考えるだけ無駄ね」

さおりさんに状況を報告するとともに疑問をぶつけてみると、回答は簡潔だった。

「ループの無い世界相からの複層ドリフトの結果、ループを含んだ世界相に変化するって事は十分あり得るから。霊的なメタ時間軸で見れば因果律は成立してるとは言えるけど、一つの世界相の中での議論は無意味」

「あー」

「……」

理解できないって事を理解できました。

世界の書き換えなんて現象を認めてしまった時点で、もうなんでもありって思っておくしかないんだろう。

それはそれともう一つ引かかることが。

「ねえ詩紀ちゃん、とある感情ってのは具体的にどういう？」

その詳細がはっきりしないからこそ、ピンとこないのだ。ごっつ。

なぜか真つ赤になった詩紀ちゃん（正確には美紀ちゃんだけ）からボディブローを頂戴し、七夏の意識はとぎれた。

十悟

詩紀の回復に伴い、市内で多発していた怪我人の異常再生や死者の蘇生現象は終結した。既に成立してしまった怪異に対する処置や処分は必要であったが、次第に不利になる防衛戦闘を延々続ける事を思えば何のことはない。

鬼や不死人による被害の抑制に関してはクロヒメ達とその関係者達の全面的な協力を得られたのが大きかった。

大学病院や市立病院といった拠点を直接抑えてもらえたのが特に助かった、と十悟は単純に考えていたものだが。しかし、さおりから防衛戦闘の総指揮をゆだねられていた飛成麻鈴女史の言によるならば。クロヒメの一人である垂氷から祝福をうけたと称する者達が各所で大いにリーダーシップを発揮した事こそが、限られた戦力で怪異を食い止める原動力であったという。

もちろん、死者二百五十二名（その大部分が一般人）という被害は決して少ないものではない。一日前の状態にまるまるリセッ

トするのならともかく（大抵はまた同じ事が起こるから意味がない）、後ろ向きドリフトをもってしても確定した死を無かったことにするのは難しいらしいが（この辺の理屈は十悟にはさっぱりだ）、十年前に詩紀が落ち込んだときの被害者が一晩で四桁に達した事を思えば僅少に抑えられたと言えよう。天陸花媛命の解放などという無体をやらかさずに済んだだけでも僥倖だ。

宮藤姉妹をつけて詩紀と気絶した七夏を帰宅させてしまっても、彼らの仕事は終わらない。クロヒメ達については玲韻と麻鈴に任せておけばいいし、檣の指揮はそもそも黒男の担当だが、その他の人員の運用や政治的な事後処理は十悟とさおりの仕事だ。商工会の事務所を借りて各方面への報告（実質的には通達）をまとめてみると、さおりが薄笑いを浮かべているのに気づいた。

「人死にが少なくて嬉しかったのよ？」

「さやか」

ものは言いようだな。

「長年の謎がやっと解けたしね」

「ご高説を拝聴しようか」

どうせ話したいんだろうからな。

「ずっと引かかったたのよ。なんであの事故にナナちゃんが巻き込まれたか」

「ほう」

「リンベンが傷ついて鬼を宿すことを期待してた人間は七瀬の一族にはたくさんいた筈だけど、五ヶ瀬家はそこまで腐ってないから。おじさんもお婆さんともな神経の持ち主だし、彼をできるだけ斗流から遠ざけようとさえしてたでしょう」

「偶然ってことじゃあ、だめなのか？」

「こここの珠坂において、純粹な偶然の存在は考えにくいと思うわ。事件で最大の利益を得たものが真犯人って考えるのが素直だと思わない？」

七夏が怪我をして、あるいは鬼を宿した事で最も得をした人間か。

彼自身が力を得て斗流の中樞に食い込むことを願ったとすれば最大の容疑者になるが、両親の意向で斗流の存在自体を知らされていなかった七夏がそんな事を望むとは考えにくい。

「して、そのココロは？」

「ナナちゃんの望みでしょ」

その可能性はちょうど否定したところだ。

「どうしてそうなるよ。あいつはついこの間まで鬼のことなんか知らなかったんだぞ」

「例え知ってたとして、あの子がそんなつまらないもの欲しがるとは思えないけれどね。ナナちゃんが欲しかったのはノリちゃんの心じゃないかしら」

「はあ？ 罪悪感につけこめるようにとか、そういう感じか？」

詩紀側からすれば、目が行き届かなくて怪我をさせてしまったという事にはなるが……

「それも一つの要因だとは思う」

「そう上手くいくもんかね？ かなり無理ゲーな気がするが」

当たり屋作戦としてはあれだけの怪我を負うようではリスクが過ぎるんじゃないだろうか。イチかバチかもしれないところだ。

「激しく同感だけど、アリスに言わせればドリフトのコントロールなんてのはそんなに精密なものじゃないそうよ。世界をねじ曲

げて望む結果を作り出すと、それにあわせて逆行性に辻褄を合わせてしまうようなところがあるって」

「つまり？」

「十年の成長を経て既にノリちゃんの心を得ているナナちゃんをぶつけて、七歳時のノリちゃんに恋心を刷り込んだってこと」

初心なうちを狙って青田刈り、同年代では勝負にならないので十年ブースト、さらに吊り橋効果つきか。

もう少し穏当な方法がありそうなものだが。それでは太刀打ちできないのが詩紀なんだろう。

「……どこまで難攻不落なんだうちのお姫様は。チート必須かよ」

「半端なチートじゃないわよ。新しい因果のループを作ってしまったえば、前提条件からはどうやってもたどり着けない状態さえ強引に成立させられるんだし」

「そこまでくると運営サイドのデバッグモードだろ」

「……上手いこと言うわね」

呆れかえって言ったら、感心されてしまった。

「そうよね。未熟でも仮にもノリちゃんが監査してたのは間違いないし、誰でもない本人のことなんだから。無意識に求愛に応えてたって線もあり得るかもね」

「いやいやいや、それならチートじみたことやらんでも普通にオーケーすれば済むことだろ」

ちっちゃつ、と。さおりは立てた人差し指を振ってみせる。

「そこまでされたなら落ちても仕方ない、って言い訳が通るでしょ」

「って、どんだけツンデレだよ」

七夏はこれからも苦勞しそうだが、きっと本人は苦勞とも思わないのだろう。ごちそうさまだ。

それにしても斗流の関係者にはめんどくさい女が多い。詩紀しかり、故お志摩さんしかり、宮藤姉妹しかり、玲韻しかり。目の前にいる新川さおりなどその最たる一人だろうな。

「ん、何？」

「いんや、別に」

こいつを落とせるような男がいるかは、はなはだ疑問だ。お眼鏡にかなうのは至難の業だろう。それこそチートが必要に違いない。

ともあれ、馬鹿な話ばかり続けているわけにはいかない。今日中に早急に処理すべき案件はまだまだ残っている。そろそろ仕事に戻るべきだ。

特に死傷者の処理が厄介だ。流行性疾患の院内感染による病死って事にして、院長の首と引き替えにするぐらいが妥当なところだろうか。

こうした決して愉快な作業ではないが、今回は若い連中には散々働いてもらったのだから、こういう汚れ仕事ぐらいは年長者が負わねばなるまい。

Admin>

珠坂新聞社の屋上には奇妙な姿の二人組の姿があった。

一人は灰白色の髪の毛のダンディーな初老の男性。その鋭い視線は自信と知性にあふれている。

しかし彼の服装は実に奇っ怪だ。拘束衣に身を包んだ状態で、

車椅子に揺られている。

その車椅子を押しているのは、頭からすっぽりと黒い布をかぶった人物。まるで漫画に出てくる西洋の幽霊じみたシルエットだが、布の裾からは黒い草履と足袋を履いた白い足が突き出している。

彼らの目となり手足となって働く信徒はどこにでもいる。情報を収集するなら、情報の集まる場所に陣取るのが一番効率良い。

そうして彼らは事件の一部始終を見極めた。

昂師>

「余計なお世話でしたでしょうか？ 主さま」

黒い幽霊が発言した。声は女性のものだ。

「牙なき人々にしかるべき力を授ける事は、星の光の御心に沿うものだ」

主さまと呼ばれた拘束衣の男性が応える。

「たとえ力及ばず倒れようとも、皆の尊厳は守られた。よくやった、垂氷」

「他のクロヒメと馴れ合うのには賛成できないが、斗流十家に対しては恩を売っておいて損は無いしな」

黒幽霊、鶴居垂氷は頷いたようだった。

「結局出る幕はありませんでしたけど、やっぱり新川のお姫様には親近感を感じます。私の対等の友人になってもらえるかもしれないと思ったのですが」

常に消極的な垂氷には珍しい発言に、御光の昂師は目を見張る。

「……そうか」

彼とて何も好きこのんで垂氷を隔離しているわけではない。

天から授かった力を持てあます者同士でもあるし、彼女であれば垂水の魅了や祝福に抵抗できる可能性も高からう。

「少しでもおまえの支えになるのなら、一度会ってみるのも良いだろうよ。彼女が一人でいてくれるなら、だが」

新川詩紀は斗流の主だ。宮藤家に連なる御庭番達に十重二十重に守られているし、ほぼ恒常的に五ヶ瀬七夏を連れ歩いている。

「五ヶ瀬さんならとくに彼女のものです。わたしなど意に介しませんよ」

「おまえが言うのならそうかもしれん。だが何らかの保険は準備しておく必要があるだろう」

なにしろ垂水の力は彼女自身の意志に関係なく常時発動している。

こうして姿を完全に隠していても、既に姿を知っている者に対しては何の防壁にもならない。危険性を知り尽くしている昂師さえ、突如襲い来る衝動を抑えるには拘束衣が必須なのだ。

彼女に触れた者は未来に得るべき記憶や技術を身につける事が出来るが……行き過ぎれば過去や未来の姿へと変えられてしまうばかりか、下手をすると前世後世の生まれ変わった生き物にさえ成り果ててしまう。優秀で野心にあふれたある男で運命打破の可能性を試してみた事もあったが、結局は身も心も悪竜に成り果てたあげく、竜殺しのクロヒメIIアスカロンに滅ぼされてしまった。そんな具合に斗流鬼斬りを集団暴走させてしまうようでは、それこそ国家を揺るがす悪夢になるだろう。

しかしこの気の毒な娘が初めて自分の意志で強く願った望みだ。多少のリスクをおしても成就させてやりたい。

そもそも彼の設立した星の御光教自体、ただ彼女を支えるため

にだけ存在するのだから。となれば、ついに御光教を本来の目的のために用いる時が来たのかもしれない。

「近いうちに何とかする……約束しよう」

「ありがとう主さま。うれしい」

幾分上ずった歓喜の声。

黒い布に阻まれ、垂水の顔を見ることは出来ないが……

「待っててね、お姫様」

その声から昂師が想像できた表情は決して屈託無い笑顔などではありえず。

彼の奉じる魔剣の巫女の笑みは、きつとほの暗い愉悅に染まっているに違いなかった。

よくあるやりとり

春屋アロツ

「お茶いる？」

「ん、ほしい」

文はソファ^{あや}を立って、キッチンにお茶を取りに行つた。そのすらりとした後ろ姿を見送って身をよじった拍子に、背中^{あや}の筋がぴきりと張つた。

「あ、痛っ」

「どうしたの？」

「……背中つった」

「背中？」

「つるんだよ、たまーに」

「足ならわかるけど……背中」

「背中つつか脇腹つつか。んー……」

つった部分を伸ばそうと体をよじったり前屈したりと怪しいダンスを踊っていると、グラスを両手に持った文が珍獣を見る目でこちらを見下ろしていた。

「何か」

「……愛する人がおかしくなっちゃっても結構見られるんだね。目をそらしたくなるかと思つてたけど」

「誰がおかしくなったよ。筋を伸ばしたいんだよ」

「どの辺？」

「この辺」

脇腹の後ろ側を示すと、文は自分の同じ辺りをさすつた。

「こんなところどうやったらつるの」

「しばらく変な姿勢でいると、つる。体が傾いてたり」

「今、傾いてた？ あたしが寄りかかってたせい？」

「なくはないだろうけど、たぶんそっち向いたせい」

「そう。あたしのせいだったんだ」

「違うって」

「じゃあ今度は君が寄りかかっていいよ」

腰が触れるくらいの距離に座って、ポンポンと自分の肩を叩いた。彼女は平均よりかなり背が高いから、背中をおかしくする勢いで傾いてもらわないと平均身長である俺の頭はうまく乗らない。

「そういう問題か」

「あたしはそんなところつらないから」

「お前、十年経ったら今の発言を後悔するぞ」

「十年経ったら、今の君より年上になる？」

「なる。てかなんで疑問形だよ。十歳も歳の差ないだろう」

「二十代と三十代」

「くっ……！」

「でも実際、歳関係あるの？ 体質じゃなくて？」

「俺も昔は足だけだったんだけどな。最近だよ背中つるとか」

「足はつってんだ」

「お前だつてあるだろ。足の裏がキュッてなつたり」

「高校生の時にプールで足がつって溺れた」

「えっ」

「えっ？」

「俺より酷いな」

「うそ……」

「なんだその衝撃って顔は」

「だって君、高校の時は既に運動と縁がなかったって」

「縁がなくても体育の授業はあったからな」

「あたしもあった」

「なかったら困るわ。高校は普通科だろ？」

「うん。専門は高校出てから」

「お前体育嫌いだった？」

「長距離走以外は普通」

「それでなんでプールで足つるんだ……」

「知らない」

「俺の体もあの頃はわりとまともだったんだけどな。クロールの泳ぎ方忘れてて平泳ぎしかできなかったけど、それでも足つったことはない」

「泳ぎ方って忘れるんだ……」

「俺も自分でそう思った。小学生の頃は四種全部できたのに」

「そのまま運動とかしてればよかったのに」

「めんどい。ランニングとか超めんどい。あと体育会系の人間関係めんどい」

「わかるわ。けどお腹出るよ？」

「まあもうじきおっさんだしなあ……」

「もうじき」

「そのうち？」

「どうして遠ざけたの？」

「近付きたいか？」

文は無言で俺の腹をさすった。

「セーフ」

「だろ」

「凹ませてた？」

「ない」

「力入ってた」

「くすぐったいんだよ。触り方が」

「叩いた方がよかったね」

「いや今の触り方でいいです」

「……おじさんは遠ざけたいんだ」

「そりゃあな。望んでなりたくないわけじゃない」

「じゃあ逆に若い頃に戻りたいって思う？」

「いや、それも別に、今幸せだから思わないな。お前と会う前は記憶保ったまま高校くらいに戻りたいってよく思ってたけど」

「過去をやり直すっていうのじゃなくて、体だけ若返るの」

「あー、若返る薬とかそういう感じか。見た目が不自然じゃなきゃ、ちょっとはな。お前もそんなこと考えたりする？」

「中学生くらいの体に戻せるものなら戻したい」

「ああ……なるほどな」

俺は地雷を踏みかけたかと言葉を濁した。もう何年も前の事件が原因で、彼女は子供を作れない。

「君は中学生くらいが一番好みだもんね」

「そっちかよ！　なんでだよ！」

「外歩いてて、そのくらいの女の子が通ると目が泳いでる」

「近くを歩いているからなんとなく目が行くだけだよ！　それに別に女子中学生に限ったこっちゃないだろ」

「女子高生も迫ってる」

「だから若い女限定じゃないっつーのに。そもそも区別つかねえ

よ」

「制服で見分けられるんじゃないの？」

「無理言うな。お前の中で俺はどんだけ変態なんだよ」

「それに、この間あたしの子供の頃のアルバム見ててその頃の写真に一番食いついてた」

「物心つく前の写真にも食いついてたけどな」

「そっか。じゃあいつそ幼稚園くらいまで戻った方が」

「やめて」

「でもそうすると外に遊びに行く時にもベタベタしにくいし、さすがにえっちできないし、もっと年取ったらあたしだけ遺^{のこ}されて何年も生きなきゃいけないし」

「妄想がリアルすぎる」

「うん、やっぱり中学生が限界」

「中学生でも今言ったデメリット全部揃ってると思うけど……中学生って十三から十五だよな。そうか、十年ちよい前なのか」

「そう。君だと……」

「数えんでいい」

「十年前でも働いてる」

「しかも数え間違えるな。大学生だっつーの」

「そっか。まあ、君は戻っても戻らなくても大丈夫」

「それはどういう意味で」

「あたしは別に若い男の子が好きってわけじゃないから」

「俺も女子中学生が好きってわけじゃないぞ」

「あたしが中学生だったら魅力ない？」

「できたら生で見てみたいけど、魅力は今のがあるんじゃないか？」

「……君ってでかい女好きだよな、中高生がストライクなのに」

「身長の問題じゃねえよ。それにどっちも偏見だっつーに。背低いからダメってこともない」

「なんでもいいんだ」

「縦はね」

「ああ、横はダメなんだ」

「いわゆるおっさん並に腹出てたりするとちよつと。病的にやせてるのもやだけど」

「確かに中学生の時より今のがやせてる。背伸びたから体重は増えてるけど」

「体重も身長考えたら少ないだろ」

「それに胸もほとんど変わってないから相対的に減ってるし……わかった」

「……何」

「あたしといい女子中学生といい、君のツボは貧乳——」
「違う」

だべーじこれくしょん

はれ

「……聞いてねえぞ」

簡単なゲームのデバッグのはずだったんだ。響き渡る轟音に恐怖を感じながら生ぬるい夏の空気を切り裂いて走っていた。

数ヶ月という期間にわたり学校で学生として生活しながら、学園内に発生する「穢れ」と呼ばれるものを回収していく最終的にクリア条件を満たすことが出来れば終了という仕事だった。

クリア条件はゲーム内で提示されるということで教えてもらうことは出来なかったがゲームという命の危険にさらされるほどの仕事とは思えなかった。

ところがゲーム終了まで間近な今日になって突然学校は崩壊を始めた。轟音とともに崩壊していく校舎を体育の授業中に見た俺は学校から走り去ったのである。

「遅かったじゃない、それに酷く汗をかいているわね。」

体勢を立て直すために自宅に戻った俺を待っていたのはクラスメイトの沙樹だった。数ヶ月の学生生活だったが、沙樹とは元々友達という設定だったのか結構話していた記憶があるが、自宅までは知らないはずだ。

「学校から走ってきたんだから当然だろ。というかお前は学校にはいなかったのか」

全力で走ってきた俺よりも早くここに来ることが出来るわけがない。ということこそそもそも学校にはいなかったはずだ。

「知ってたのか学校が崩壊することが。」

沙樹は当然のように答える。

「何度も繰り返ししてきたから知っているは、あなたみたいな人も何度も見てきた。教えてあげるわ。このゲームのクリア条件よ。」

「ゲームのクリア条件は穢れをなくすことじゃなかったのか。」

「それで間違っていないわ。ただし、すべての穢れには私も含まれるの。」

「そんなはずがない。穢れは黒っぽいゴミのような奴のはずだ。」

「あなた本当に何も聞かされていないのね。このゲームの正体を。」

沙樹が言うにはこのゲームはある人物が実際に経験したことを再現しているのだそうだ。穢れと呼ばれる存在をクリアしていくことでその人物の記憶を整理することが本来の仕事だという。

「この時間のアイツにとって最大の穢れが私。私をアイツから遠ざけることが出来ればアイツの記憶から私は消える。私を殺すことがゲームのクリア条件よ。さあ、私を殺さないよ。ゲームなんだから簡単でしょう。首に両手をあてて力を入れるだけで手に入るのよ」

誰かが体験した記憶の中というゲームの中であっても人を殺すことが出来るのか。ましてや数ヶ月の間とはいえ友達として過ごしてきたというのに。俺がどうしようか迷っていると寂しげなあきらめたように笑って表情を見せて咲が言った。

「さよなら。また、逢いましょう。まあ、今度のあなたは別のあなただけでしょうけど」

急に頭の中に人工的な音声がかえってきて俺は意識を失っていた。

「アウトオブメモリーエクセプションが発生しました。ゲームの

再起動を実施します。」

慣れたアラート音が監視ルームに響き渡る。私はコンソールをのぞき込み発生原因が条件不成立による再起動であることを確認する。

クライアントからエージェントを切り離す作業はシステムスク립トによって自動的に行われる。

私がある間にすることは収集人達の行動ログの確認とクライアントのバイタルが正常であることを確認することだけだ。

万能の薬と呼ばれるこの施設は若返りを実現する医療施設である。再生医療の進化により体の老化を防ぎ若い体得ることが出来るようになった現代においても、不老不死は簡単には実現することが出来ない。人間が記憶することが出来る容量に限界があることが原因であり、大なり小なりの不要な記憶を削除するガベージコレクションという作業が必要なのである。

不要な記憶を消すのは収集人と呼ばれる人間の手によって行われている。将来的にはシステムによって対応されることが期待されているが、現時点においては人間の判断によることが最適とされている。

収集人達は成功することが出来れば多額の報酬を得ることが出来るが、彼らが失敗した後はどうなるのかは私は知らない。わかっているのは報酬を得ることは出来ず意識に多大なダメージを負っているということだけだ。

関係しない仕事には踏み込まないのが自分のポリシーだし、会社も仕事を限りに亡く細分化し良心の呵責に苦しまないようになっている。自分の仕事はクライアントが状態が適切であるかどうか

確認するだけだし、他の者も分割された作業を担っているはずだ。「必要のない記憶を失って、若い体を手に入れたとしてそれは本当に若返ったと言えるのでしょうか」

以前上司にそう聞いたことがある。

「さあね。何もかも変わってしまったとしても、若くなった肉体と頭脳、そしてサービスを受けるのに少しばかり減ってしまったとしても多大な財産をもってすれば、強くてニューゲームできるわけでしょ。それが完全に無意味だとは思わないよ。」

チェック完了を告げる音が端末から聞こえた。次の収集人を接続する作業が始まる。

禁じられた営み

Fukapon

「俺の、舐めろよ」

その言葉が画面に入力した文字列と一致していたからだろう。

彼女は言葉が、己の耳を通じて聞こえているものだと思しなかつた。

改行キーを叩き、少し強引な彼に應える科白を続けようとしたとき。

はたと気付いた。

彼女、鈴木百合が素早く首を右に振ると、視界には少女の微笑みがあった。

「——！」

驚きのあまり、百合は言葉を失った。カギ括弧を開こうと右薬指を伸ばしたまま、動作も失っている。

少女はキーボードの上に伸びた、透き通るように白いそれを見逃さない。

「『は、はい……』とか言つて舐めちゃうんですね？ 先生つては無理矢理されるのが好きなんですか？」

次に入力される科白を耳元で囁く。

西日差す職員室は人影もまばらで、少女の小声が誰かに聞こえることはない。

しかし百合の頭では、少女の声だけが浮かび上がる。

「は、林田さん。ちょっと——」

キイと椅子のキャスターが鳴く。

立ち上がった彼女は目の前の少女、林田佳苗^{かほな}の手をひたくり出口にまっしぐら。大きく開くスカートのスリットを気にも留めず、俯き加減で同僚の背後を通り過ぎた。幸い、色白を通り越して、血の気が失せた顔色に気付くものはいないようだ。

腕を引かれる少女は相も変わらず。

「百合先生、無理矢理する方が好きなの？」

不敵な笑みを浮かびながら、しれつと言ひ放つ。腕を掴む力が強まるのを感じると、少女はますます口角を上げ、目を細めた。

職員室を出て、二人が入ったのは生徒指導室。職員室の隣で「昼寝部屋」との異名を取る、要は事実上の空室である。

「あ、あのね。さっきのこと」

佳苗を引き入れた百合は、間髪入れずに引き戸を閉じて、堰を切ったように言葉を投げる。

「誰にも言わないで。お願い、お願いだから」

百合の瞳がキラキラと光って見える。レンズの向こうは、明らかに涙目だ。

まさに懇願、後のない表情に、佳苗は事もなげに返した。

「大丈夫、言いませんよ」

百合は瞳を見開き、佳苗を見上げてへたり込む。望んだ回答とは言え、予期せずあつさり得られたことで力が抜けてしまった。

抑えていた涙は、安堵に押されて頬を伝う。

まるで妹みたい。佳苗は十歳以上も年上の彼女を、少しいじめたくなった。

「言わない代わりに、お願いしたいことがあるんです」

安らぎを吹き飛ばす科白に、百合は驚き、佳苗を仰いだ。彼女の表情は、科白同様に脅迫じみた悪さを湛えている。

百合は再び、顔面が冷たくなるのを感じた。

「さっきは本当に、本当にびっくりしたんだからね」

百合はぶくつと膨れっ面を作り、ブランコで脚をパタパタさせた。

己の仕草が何を誘っているかなど、気にもしていない。その無邪気さが佳苗をなおさら煽ってしまふ。

「まだ、安心するのは早いと思いますけど？」

「そ、そんなあ……」

「冗談です。単に、煮詰まっているならお散歩にでもと思ったただけですから」

「はう。心臓に悪いからやめてよお」

佳苗の言葉に応じて、百合の脚はびたりと止まり、再びパタパタと動き出し。

まるで子犬のしつぽだ。

「そんなにびくついてて、よく学校で書けますね」

「だって壁際の席だし、周りに誰もいなかったらバレないじゃない？」

「いや、バレたからここにいるんでしょ……」

「うう、その通りです……」

器が大きいのか、抜けているのか、天真爛漫そのもの。

自分が男だったら、無理矢理させてみたいと思うってしまうかも。また動きを取り戻す彼女の脚を見ながら、佳苗は考えてしまった。

「でも、そのおかげで百合先生とお話できてよかったです」

「え？ いったって話してくれていいんだよ？」

「一応、学校の先生が相手ですから。同人誌の、おじさまとエッ

チする話をするわけにいきませんよね？」

「ち、違ふよつ。安藤はおじさまじゃなくて若手の敏腕営業で――」

波に乗らんとしたアダルトな話を遮ったのは、公園を正しく使う、子供たちの声だ。

「すいませーん。ボール取ってくださいーい」

お願いと同時に、小ぶりのサッカーボールが転がってきた。

「おーけー」

大声で返した佳苗は、つま先に当たり動きを止めたボールを一瞥。立ち上がり背を伸ばした。

小柄の百合にとつて、彼女の姿は余計にすらりと高く見える。少し羨みながら、蹴り返すのかなと思っていると。褐色の手が、真つ白な手を引き上げた。

「せっかくだから混ぜっちゃお」

「え？」

「行くよ！」

佳苗は事もなげにドリブルしながら走り出す。

百合の手を掴んだまま。

引つ張られる百合は何が何だかわからぬまま、転んで引きずられないようにと必死で脚を動かした。子供たちのど真ん中に飛び込み、ようやく手が解放されると急ブレーキ。両膝に手を当て地面を見つめて、ゼーハーと肩で息をしている。

「お姉ちゃんたちも混ぜてよ！」

威勢のいい佳苗の声を聞きながら、しばらく整いそうにない呼吸に一生懸命。

一方の佳苗は、呆氣にとられた周りも気にせず、ゴールキーパ

「であろう子を見定めるとシュート。見事にキーパーを掠めて、ボールを背後へと抜く。」

「ほらほら、お姉ちゃんのパンツに見とれてると負けちゃうよー」
短いプリーツスカートをパタパタしながら、挑発に乗った子供たちの相手を始めた。

日が暮れると、スーツ姿と制服姿は帰途についた。あちこち汚れた二人だったが、暗い夜道では目立ちもしない。

「身体中ガタガタだよ……」

弱々しい声で訴える百合の足取りは、訴え通りにおぼつかない。
「済みません。ちよつとはしゃぎ過ぎちゃって……」

「ううん、おかげでなんか、うまく書けそう」

疲れた色はそのままだに、百合は満面の笑みを見せた。

彼女の笑顔に、佳苗の足取りはますます軽くなる。

「それじゃ続きが書けるよう、ちゃんとお家まで送りますね」

「もうっ、子供扱いして。一人でも帰れるあああつ」

「ほら、ね。一人じゃ危ないですから」

言ったそばから躓いた百合の腰を支えようと、佳苗は彼女の手を取り、また歩き出す。そんなことを何度か繰り返して、一度見た地図を頭に描きながら十数分歩いた。

しばらくの無言の後に、佳苗が小さく呟いた。

「百合先生、デート、しましょうか」

「えっ？ 何？」

単純に聞き逃したらしい百合に改めて、周囲を指差しながら伝える。

「ホテルで休憩、経験してみます？」

「えっ？ 何、言ってるの……？」

今度は理解している反応。

佳苗は確信して、百合の腰を引き寄せた。

「きつと役に立ちますよ？」

百合とて言われている意味がわからぬわけではない。数時間前の冷や汗とも、さっきまでの汗とも違う、生温かい感覚が背中を伝った。

拒んでいるのか、望んでいるのか。自身の気持ちがわからない中、身体は少しずつ、佳苗に飲まれる。

夜の肌寒い空気の中、腰から伝わる体温が心地よい。顔を埋めた膨らみは、百合の知らない柔らかさだった。

「おいで、百合」

頭上から聞こえる誘いは、彼女に言い訳を与えた。

呼ばれたから、仕方なく。百合は右手を、恐る恐る佳苗の腰に回すと、腹部がぎゅうつと合わさっていく。

「あつたかい」

「デートシーン、書けそう？」

「うん。……えっ？」

百合がふと顔を上げると。

「フォービドゥン・マリアージュ、義兄の——」

「ななななな——ななにかなあーそれえーっ！」

降ってきた甘い囁きは、強烈な目覚ましだ。

百合が慌てて腕を解くと、佳苗もあつさりと離す。ただ、甘つたるい口調はそのまま。

「『経験が少なくってデートシーンが苦手なんです』って小説家が言ったらおしまいですよ？」

「やーめーてーっ！」

百合は再び佳苗に寄ると、両手で彼女の口を塞いだ。

しかし力では圧倒的に分が悪い。あっさりと腕を払われる。

「先生の新作、楽しみにしてますね。では、お休みなさい」

わざとらしい優しい微笑みとともに、佳苗は背を向け、小さく手を振り去って行く。

百合がいつか書いたシーンのようで、見ていると顔から火が出そうだ。彼女にはもう、反応の選択肢は残されていない。

「デートシーンだって書いてやるわよっ！」

大声を投げ返し、彼女に背を向けた。

お元気ですか？ 文字通り…

川鵜鶏肋

ラスト前は仕事が忙しくて死にそうでした。落ちなくて良かったー。

お題を見た瞬間にタイトルとプロットが一気に浮かびましたが、なのに当日まで掛かっています。筆遅すぎです。例によって過去作とリンクしております。よろしければまとめて読んでやって下さいませ。あれ、前回とほとんどいっしょだぞ（笑）

春屋アロツ

いつもの子たちは若すぎるので見覚えのないカップルにしゃべってもらいました。

<http://third.system.cx/>

なぎ

4月から転職して、Java を使う現場になりました。Full GC や Exception の文字がログに流れていると怖い。テーマは非常によかったのでアイデア出たのですが実力と時間が足りなすぎる。今回も印刷がんばります。

Fukapon

前回と惨状が変わっていない……。前日によいアイデアなんか出ないよ！ と思ったので、そのまま話にしてみた。残念ながら私は見つかって脅されたりされないんですけど。未完だった前作は次に全面書き換えで完成させます。と言い切っているのか？

<http://www.fukapon.com/>

レイアウト

間に合えば何でもいいよ。

とゆー感じになったのは私のせいなのでごめんなさい。

<http://www.projectkaigo.org/>

mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしております。
細く長くやっておりますので、4年に1回参加とかおすすめです。
でも毎回参加してくれるととっても嬉しいです。詳細はウェブで。

Next Issue in November 2013

転落 <http://www.projectkaigo.org/>

とゆーテーマで次の作品を募集中。ジャンル問わず。
締め切りは当日00時、だいたい02時ぐらいまでは楽勝。
コピー本だからさ、何となく書いて何となく出すのが◎

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 11

若返りの薬

2013年5月26日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2013 川鶏鶏肋, 春屋アロツ, Fukapon, なぎ, まにふいくみやはか
この本は Creative Commons Attribution 3.0 Unported License に従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/> をご覧ください。